

は持たれども、今のお言葉お心にどんとほだされた。今宵はわが身を任せません。實如何もなりませぬ。好た男と寄添は、あるじ夫婦は手をたゝき虎様を手に入るは、今の世のすいめ如何様御縁か大盡様の、お顔に能う似ましたと騒ぐにぞ。いよく悲しさをやるかたなく兄とも知らず淺ましや、可愛の者の身の果やと忍び涙はせき散す。透間のあらは名乗んと心をつくれど、妹女郎やりて禿引舟なんど入交り立かはり、奥には酒宴手をたゝき人を呼ぶやら喚くやら、かしがましさに紛らはしくあだに夜をこそ更しけれ。かくて夜も更ひへばちとお床へとよび立る。禿が案内に勝重も奥の「一間に移りしが浮世を思ひ、めぐらせば無念さす、み口惜く只泣より外の事をなき。時を移さず虎も一間に入りければかぶらはあたりを差まはし燈火暗くそむけ。さしてもない事囁き廻り、ひんしやんとして歸りける。掃部はいよく心くれさしうつ向て居たりしを、虎さては持せぶりとちと悪くや思ひけん。會釋もなく床に入り枕一つてよいものを、誰に寝よとて面倒なご一つの枕取て投げ金引。かづき臥にけり。掃部聲をひそめ。なふ某は遊興ならずは身に問たき仔細あり、其方まことの親里は三島の宿、小柴の郡司と云ふ人の娘にてはなきかと云ふ。虎はつと思ひなぶられては不覺なりと。されば親達は如何あるもしかと宙では覺えませぬとある。ヲ、かくする尤。我は兄の掃部の介勝重よ、いひも敢ぬにおき上り詞はなくて兄の顔。しげくと打眺めはつとすがりて泣出すことわり。せめて哀なり。や、有てまことに思へば幼き時。見し顔に覺えあり今かゝる身の憂愁さ。父母のは爲と思ひ流せば悔みはなし戀しきは古郷ぞや。父上様母上様何とほ入りひぞ。珍らしの兄様やなご今までは音信も遊ばさぬぞ。とくにも名乗給はでよしなき。舉動恥かしやと。あるひは恨み或は口説際にもたれ身をよせて。兄妹手に手を取かはしなげき。暮ふぞ道理なる。掃部涙をとめ母上の傳言。父郡司の最期のしな。語りも敢ぬになに父は討れ給ふぞや。

それは誠か情なや。もの憂つともも親達に逢はんと思ふ樂しみに。憂年月を渡さしに存らへて甲斐もなし。女ながらも親の敵せめて一太刀打せてたべ。さもなくば一思ひに。殺してたべ兄上様と聲をあげてぞ。泣にける。掃部いさめてヲ、出来したく。我もさこそ思ひつき。扱此廓を何としてかはいづべきぞ。それは妾に任せ皆々臥して時分よしと。下女の單衣の上に掛け手拭かづき酒樽持ち。掃部とはあどさきに鼻唄うたひ大門口。つゝと通れば夜番共。伊勢屋の杉か酒屋はもはや寐つらふにと。見達へ通せば虎御前虎の尾を踏む心地して。足も中々地に着ずいさをはかりに落給ふ。はや七八町遊のびしに二十餘の男つゝと出で。やあく女め。おのれと某夫婦の契約數通の起請。身に思ひ有るそれがしが。かく糾されしはおのれゆゑ。宵よりつけて伺ひしに彼男にたぶらかされ。淺ましきふるまひ畜生に劣りたり。傾城ながら夫婦の約束あるからは。彼は密夫かさねざりと飛びかゝる掃部驚き。ア、暫く。彼と我等は兄妹疎忽なされなど。いはせも果す。卑怯者偽るなど切んとするをはて若い人おせきなされな。我は小柴掃部勝重とて彼が兄にまされなしと。父が討れし有様語り敵を討せ申さんため。召つれたち退き侍冥利偽なしといひければ。虎も縋りてなふ何しに心かはるべき。は事は忘れねども事急にひへば。先此廓を立出ですぐにしらせやす覺悟。心をしづめ聞たまへニイせくこともないものを。此汗はいの袖にて額を押拭ふわりなき姿ぞ殊勝なる。かねく虎が物語は名をも承る。それがしは聞も及び給はん曾我の十郎祐成とや者。ほ存じの如く工藤左衛門祐經とて親の敵を持たながら。彼にはだされ此仕合せ向後は縁者なり。かの忠木めは我が爲にも舅の敵。もろとも討て本意を遠ん尤を頼もし。いざ明ぬ間に箱根山五郎が方へ参らんと。打つれ歸る弓取のはまれも月も名に高き。山を越え川を越え箱根の御寺へ急ぎける月こそあれ日こそあれ。不思議なりけるえにしかなと思へば。浮世も捨がたし。

牙

草も木もいづれ哀の種ならぬ。昨日の紅葉霜枯にうつる月日もかさなりし。思ひは山よ麓寺静も髪を切柴の。庵室をしらつひ虎兄妹の母上を。我親よりもかうこうにつかふる道ぞごわりなる。虎も静のころざし昔は同じつとめの身。語るにつけて睦ましく猶祐成にをりくくのおふ夜しげきに世の愛もしばし。忘れて暮しける。掃部やされけるは。静御前の介抱にあらずんば敵を狙ふそれがしが。老たる母や妹の虎何國に身をかくすべき。は戀情こそ忘られね。然れば鎌倉殿所々の御狩と承る。幸のをりなれば罷出て狙ふべし。妹と心をあはされ老母が事。一入頼み存すると立出れば親子の人。静もおもてに送りつゝいとまごひして別れけり。しばらく有て會我五郎時宗案内請ふて庵に入り。此間は見舞も致さず。掃部殿はいづくへぞは老母は達者なかとしほくとしてやける。虎心をつけ。大事のほ身をもちなから。祐成様と同道は遊ばさずお一人は何事ぞ。又兄弟いさかひなされたか。は顔色もすぐれぬは心得がたしといひければ。五郎なみだぐみ我等が身程世に淺ましき事はなし。人々聞て給はれ。祐成と云ふ親の敵を持たる上。又は身の親を討たりし番場の忠太も兄祐成には舅の敵。掃部殿と一所に我々討ては立がたし。祐成だにも大敵なるに敵二人討つ事は。大事の上の大事なりと思ひそれがし母の命を背き箱根の寺を忍び出で。元服してひへばなご出家にならざるぞ。母に背くは不孝者と勘當蒙りひぞや。死したる父に孝養せんとすれば生たる母の不興となる。あはれ人々よき様に取なし説言して給はれと十郎殿へ来てたべと。勇る眼に涙を浮べ。打しはれて語りける。老母聞も敢ず扱お笑止や最愛や。去ながら妻も老年身に思ひ有り若き子供を持たれば。母御様のお心もつまされて思ひやる。よもにくふては宣

はし苦しからずは自が。推参してもお説言致したうひとあれば。静御前もよそならず皆うちつれて中めやすべし。いざくこのたまへば虎聞たまひ。尤もかし然れども祐成様のお心入もあるべければ。妾とつくと談合しあしからず計はん。萬事任せ給へやと。時宗伴ひ笠打かづ古郷。ゆかし。三時宗は箱根にありしるしに。法華經一部讀み覺え。つねは讀誦し母上の。現世安穩後世善處と祈念する。又は毎日に。六萬遍の念佛父河津殿に向向する。かほごに他念なき身を此三年不興蒙ふる。そも何のむくひぞや。なふ祐成殿。今日母のほめんなくば。一かうは手に掛てたべと涙を流し申けり。う。道理なり時宗。此祐成が共に勘當うくるとも是非に申し直すべし。しばらく其所に待れよと奥へ通れば時宗は障子のそとの廣縁にしほれて。こそは居たりければ心に聞に。あらねども。子を思ふ間に母上は。祐成と聞からに。書院に立出で給ひ珍らしや十郎。今日は朔日母見んとての祝儀かや。直垂にも皺よらず折目正しく着成せしは。只一つある装束にてたばふて平素は着給はぬか。さなきだに會我殿原貧なりとて笑ふと聞く。男の直垂着るとて必ず人に卑しめられな。妾こそ年老たれ二の宮の姉を頼み。潤色洗濯しかへても。かまへて直垂放すなえ。今日の祝の盃せん。それくご女房達銚子。盃まゐらす。いつしか親子の對面をうらやましげに時宗は。高天の山の峰の雲同じ母の同じ子に。は覺え蘆垣のへだてあるこそ悲しやと。障子の隙よりさしのぞき泣より。外の事ぞなき。母上盃取上げ祐成にさし給へば。祐成一つ請ながら持て立んとしける時。母上は覽じ心得ぬ祐成のふるまひや。母が献たる盃を飲で立は何事ぞ。祐成涙をばらくと流し。さんみそれがしは重ねてもは盃いたく事なりやすし。三年が間母上の盃いたくかぬ弟に。頂戴させいと謹んでやさるれば。母はやがて心得給ひ。すちなき事は申されおことならで子は持す。京の小二郎は異父なり奉公人。二の宮は娘なり禪師坊は越後にあり。ヲ、思付た

り箱王と云ひしえせ者が事か。夫は以前勘當してみづからが子ではなし。伊豆箱根富士権現も照覽あれ
 永き世までの勘當ぞ。ア、世の中に河津殿ほごつみ深き人はなし。後世吊ふ人は亡びはてたま〜持た
 る子供さへ。香花とるべき者もなくお事を男にしたるさへ。如何ばかり悔しきに母を母とも思はばこそ
 出家を嫌ひ元服して父や母が未來をば。何とも思はぬ不孝者。何しに盃獻べきぞ。出家はゆるしもあ
 るべけれ男は免れず鎌倉殿。謀反の末と捜し出され二人の子供が殺されば。母に嘆きをかけん爲か河津
 殿ましまさばかほごには有まじき。母の親とて侮づるか子は三界の首枷よ。恨めしの心やと聲をしま
 ず。泣給ふ。時宗泣く〜障子の外より。心に背きし上すは恐れ多けれ共。全く某母を輕しめやす
 でなし。河津が子共は腰ぬけて敵を得討ぬいひわけに。出家せしと言はれては親祖父の恥ならずや。思へ
 ば兄弟三つ五つ父の顔をも見せざる恨。そも武士の外に見てあらるべきか。某出家を望むとも兄十郎殿
 に友もなし。汝さへ見捨るかとは叱こそあるべけれ。さうじて親のならひ盗みする子は悪からで繩掛る
 人をにくむとはやぞや。さうしては心強き母上様。女房達はおはせぬかよきやうにやてたべ。曲もな
 き人々と聲をあけて歎きしはことわり。せめて哀れなり。母は重ねてさればこそ。死したる父のみ親に
 て妻は如何に親ならずや。げにまこと子を持ねば親の恩を知らずとは。能く〜傳へたり。十郎だにも
 男になしたる悔しくて入道せよとも思ふぞや。但し十郎をうらやましと思ふかや。一疋持たる馬をだに
 毛なだらかに畜せもせず。一人具したる下人にも四季折々の扶持もせず。見苦しき體を見る時は世にあ
 る人の子共に器量も智慧もまけねども。四百四病の病より貧はごつらきものはなしと明暮母が心のまよ
 ひ。子共かはゆきはかりにて思はぬ怨も出づるぞや。上臈も下臈も法師になれば修行とて。頭陀乞食に
 身をなして昔の袂も恥ならず。せめて一日半日も老たる母が心を安めぬ不孝者。何しに勘當許すべき。

百萬町の所領にもかへまいと思ふ子を。勘當といふ母がろも嬉しかるべきかど。せきわけ〜天に仰
 ぎ地に伏て。口説たまへば祐成も時宗も。女房達も一同にわつと消え入り泣給ふもの。あはれは是な
 りし。祐成や、あつて一旦の仰を背き。法師にならぬは不孝にてひへ共。時宗父母に志のふかき事僧俗
 によるべからず。幼少にて父にはなれ。身貧なれば一門とては目も掛す。母ならずして誰か憐み給ふべ
 き。立寄る蔭もひはねば乞食とならん事ふびんにひ。一つは慈悲一つは又。祐成が身の力彼ならでひ
 はず。何事も此祐成に免あり。盃を時宗に給はれかし。さもなくは一向に時宗が首討て。返す刀に
 祐成も腹切までい如何に時宗。討て捨るを罷出でよと障子さらりと開ければ。母上は覽じやれまで十
 郎左程に思は。盃を時宗にさすぞとよ。さりながら長くは有さず。此酒を飲はず聞しは有す。飲は
 して其後はもとの如く勘當ぞとのたまふ聲も涙なり。五郎みだけだかになり。エ、餘り酷きは詞酒は所
 望にひはず。盃とすも勘當のゆゆるしを請んため。心強や情なや最早浮世に生甲斐なし。ひ前にて
 腹掻破り瞋恚を安め奉らんと。既にかうよと見えし時十郎絶りおしと。何と聞ぞ時宗只今母の詞
 此酒飲はず其間勘當ゆるすと宣はずや。然れば此酒を分が一生大事に掛け。飲で其ま、置からは
 勘當は許さる〜と云ふものよ。如何に〜と云へば五郎手を打ちア、さうじや有難し。然らば此酒一生
 飲すもし相果ば棺に入れ。未來までも勘當永く免されやべし。ア、一命よりも大事の酒ぞと千度百度
 飲さ〜盃に据え。又もやひ意の變るべきまづ今日はおいとまど。悦びさめめ立歸る足もさだかに定
 まらず。袴の裾を闌に踏みかけ。どうと轉べばかなしやな。此酒さつとこぼれ土器徹塵に碎ける。兄
 弟是はと騒げどもすべき様のあらざればあされ。果てたるばかりなり。時宗わつと聲をたてア、南無三
 寶なむ三寶。能く時宗は天道にも悪まれ先生よりの業因にて。かばかり親に憎まる〜は定まる事と知ら

すして。世をも人をも恨みしな此世の業を引なれば。死しても父の河津殿に回りあふは難かるべし。七度契りて親となり三度結びて兄弟と生るとは傳へしが。か程に親に縁なくは何しに血をば分たるぞや。前世の悪縁悲しやと拳を握り身をふるはし。廣椽にかつばとふしおめき。さげんで嘆きしが。エ、何をか期すべき十郎殿。介錯頼み奉ると刀の柄に手をかくる。母はあはて、絶りつき物に狂ふか時宗。勸當も最愛さ故最早免すぞとまれ。死ねとは母が何時いひしぞやれ母は死ねとはいはぬぞと抱きついて泣給へば。時宗も祐成もあら有難やと手を合せ、嬉し涙に目もくれて。母の右左の袂に絶り泣より外。事ぞなき。かくて時宗三とせが程の物語母上もゆかしさに。兄弟を引寄て袴の着際烏帽子姿。河津殿にさも似たり構へて兄弟中よくせよと。扇を以てあふぎ立てかすく廻る盃に。いで殿原によき小袖取らせんと。祐成には練緯に花づくし。時宗には唐綾に鶴龜繡ふたるは小袖を。かづけ給へば兄弟は戴き肩に打被て。是や親子の限りの契り名残壯鹿の狩場の門出。暇して歸る山の富士のは狩に折を得し。敵を討て年來の胸の煙も富士嵐に。晴して月を清見が關に。其名を高く止めける親孝行の例には。智あるも愚なりけるも今に。傳へてかたりけり

オス

父母のます時は遠く遊ばずとや。曾我殿原はそれよりも叔母婿の三浦の介平六兵衛は従弟婿。二の宮の姉婿北條殿は烏帽子親。鳥山の重忠別て懇切なりければ爰にて日をを送りける。本田の次郎近常いざ給へ殿原。相摸川のさび鮎とつて一こん献んと夕露の。玉繩釣竿打はへて玉鳥川にあらねども。小鮎さばしるせいら木にかだみて魚はよもためじ。げに面白き景色やとゑつばに「入てぞなくさみける。爰に尋

場の忠太國久下人等二十人許川上下ひたり。洗足するに水だくくと濁り来て。波岸をたぐくにぞ魚は散で逃げ失せける。近常安からず思ひ。釣竿なげすて太刀に手をかけ。何者なれば川道遙の水上に。土足を踏込み水をにぞす奇怪千萬。返事に依て堪忍せじと氣色かへてぞやける。番場少ともひるます。ム、本田殿かはてぎやうくし。かく云ふは梶原が家來番場の忠太國久よ。鎌倉殿淺間野のは狩のは供に伺候致し。狩場より急なるは使にて三浦へまかり通る。土足にては使いかしく足を洗ひひが。水濁つて悪くば外のすみたる川水にて釣れよ。和殿が釣のさまたげとてお使はやめられずと猶々水を濁しける。近常もとより堪へぬ者。然らばなご最前に詞をかけ一旦は免とは云はざるぞ。は使を頭にきて慮外をする事侍の法なるか。命が惜くばは免といへ。さなくばは使とはいはせぬさあ何と。詰かくれば。はて扱見まふた事をいふ人かな。此末長き大河の川下に。人がな有ふとては免を請ふて渡る者の有べきか。エ、堰せばし夫は小人の。大海を手で堰とはは分が事。是我々はは公用にて。其方如きの樂人と相手になる暇はなし。是にてゆるりと鯛でも鯛でも釣れよ。それ急げ者共と言捨てかけ通る。近常今は堪へかね一掴と飛び出づる。祐成時宗しばしと止むれば。異な事を制するは怯れたか兄弟放せ。と捻合しを。祐成聲をあげ。いやさ怯れは致さず仔細有りやうく。仔細と申すは別儀ならず。豫てお咄やす通り彼奴めは大磯の虎が親小柴の郡司を討し者。虎が兄小柴の掃部。親の敵とて心を碎き規ひひ。只今お手に掛られては幾許本意なく存すべし。我等が爲にも眞の敵掃部に初太刀を討せたく。我等も堪忍仕る先しばらくと制すれば。近常やうく聞入れ然れば餘儀なき事。なふ夫につき究竟の事こそあれ。近日鎌倉殿富士の牧狩遊ばすにつき。は狩に馴しは馬なれば梶原が承り。日本國の牧々より召るゝと聞けるが。其使と覺えたり。人々を遠國の馬引に拵らへ。此近常が手引にて彼奴めを討

取り。九萬九千の軍神に手向なば。工藤左衛門祐經を討取るも案の内。勇めや勇めと立出でしが。ア、思へば腹立ち追駈て被奴めが死なぬ程ちつくと切んと立返る。今日は是非にと止むれば拜むちつと切せてくれと。かけ戻れば押鎮め走り出づれば引止め兄弟脇に引添ふて秩父の屋形に 三重、歸りけり

なりのまゝ

君が功勳。三國一の富士の牧狩あるに依て。池月磨墨大黒小黒亡しこのかた。召料の名馬なし願に馬をえらばるべしと。梶原父子に仰せ付られ諸國よりこそひかれけれ。東の機敷は左馬の介西の狩屋は右馬の助。逸見壺坂大坪服郡小笠原。凡そ馬乗の達者と呼ばれ其名を得たる大名小名。近習外様のこりなく。は厩の別當徳竹しんの鞭をひつさげて弓手の芝に伺候する。扱伯樂には桐原の權平内。承つて一々に。由緒を語つてひかせたりはなやか「なりける有様なり。先づ一番に雲雀毛の。夕日いざよふ紅の濃染の三がひ熊野打。木地の鞍に銀覆輪足取かるくひかれしは。いづくそだちぞやされよ。是は對馬の何某が駒の中より飼立て。唐土人の諸手綱曲馬になれし其不思議。四足を縮むれば方寸の盤に立ち。のぶれば弓杖五杖六籠。ひらりと飛ぶこと飛鳥のごごとく聞えけり二番にひきし青の駒。霞けたて、春風や花の「蕪のこぼれ櫻にこぼれ梅。蒔繪のかいぐ敷しは如何に。そもく此。は馬とやすはいとも畏し當今の。いまだ春宮にまします時。は厩に立られしかば程なくは即位まし〜て。白馬の節會に御覽あり。吉相目出度は馬なり。恐れ多くはいへども。源氏の位代を祝ひまゐらせさてころひかせひふよ。げに目出たしや香に愛し。花桶を螺に。金覆輪の鞍おかせ五色の糸を打ませて。大總小總かけしは何と名にしおふ逢坂の關の。岩角ふみならし。山立。「出る桐原駒。木曾のかけぢになれたれば。此度富士の

高山に。召されていみじうひべし。四番に立る草毛こそ。今關東にかくれなき。駿足の逸物草駄天草毛是なんめり。天晴馬や駿足や。梨子地の鞍に高蒔繪。濱松のおとはざんざつと寄せ來る磯の波をう。く〜。さうつとはめて牽れける。是は覽せよ是こそは。上にも存じひはん小松殿の屋形黒。は馬は少し老たれども。かけに早く肝慮す。加田野の芹川北山の。小高に馴て〜ころよく。ときの際を聞ふれて百萬人の列卒鼓。けしとむ事のひはす自由。自在を召れんに。いづれか是にはまさるべき扱其次は河原毛の。牧髪牧爪に逞ましく。丈拔群に立まさり鞍をも敷す毛も焙さす。白練の馬被をかけ舍人數多を引立て。鋭く嘶へ出でたるはいかさま謂有つらんされば此馬は。結城の土民が耕作に使ひひしが。は覽の如く牧飼にて口飽までこはく。暴る時は獅子。狼をも駈たふしもてあつかひひとて。あざなを糞贈と所の者は申すとかや四調。由々敷ひへば。乗入て召替に。は牽せひへかし。畜類心なれども草木も靡く源の。君が心になつきなば奥の「は牧の。また荒駒も。柳の糸で。繫ぎ留ばやしつかどさ。舍人が鞭はしツかの角打たる錦の鞆。唐綾手綱よなせ〜引寄せて。ゆらりとめさるべし。同じでたちの馬裝束。毛色も同じ白月毛二疋列べてひいたるは。是はそも如何に語られよ。是は出羽の國司に白玉といつし名馬の胤。一つ腹に生せし故。太郎月毛。次郎月毛とやて。笠懸流綱馬犬追物。馬場乗輪乗。庭乗遊乗は遊興の爲には。めでたき逸物ひなりあどに一際引き下り。飼に飼たる栗毛の駒。金銀の糺糸にて小波うつたる厚總懸。鐵地の鏡塗りさばし。菊に扇の蒔繪の鞍行繩追繩口取繩。馬場前狹しと打たりける別て美事や如何に〜事も愚や是こそは。足利の忠秀が。常陸の社へ百日籠つて得たる所の名馬にて。神通栗毛とやなり。先は馬はあけ七歳やき八分に立伸て。卅三の相現はれ青龍白虎四つの脚。馳れば千里も遠しとせず息には朝の嵐を吐き。蹄に夕の雲を踏む。嘶ふる聲はろく〜として。一鞭を

あつれば萬丈を越え、舟にのすればさせるが如く。宙を馳り虚空をゆく。扱又嶮岨巖壁の、山川谷、峯岸岨難所難山海上も、馳り越え、脚をそろへて、かつし、とあゆます肝は強くて道ははやしはむるに辭およばれず。又戰場に召さる、時、敵のいるを察してかけひき心のまゝなること。其徳宛然神の如しと言上すれば人々も、尤と同じつ、第一にこそ立てられけれ。其外聞ゆる駿馬の數、北國立關東立信濃駒甲斐駒、牧々はいふに及ばず島々浦々里々より我も、く、と牽たれば馬は三千八百餘疋、中にすぐつて三百疋御狩の名馬と定めらる。上古當代末代にも重ねて例あるべからずと上下、ざ、めく其聲はしばし残りて、三、やまざりけりかゝる所へ。小柴の掃部會我兄弟袋笠に姿をかくし駒の口取り、是々奉奉行へ申す。我々は最上の土民此馬よき馬にてひへば、さしあけ度ひ取次頼むといへば、忠太きつと見かつら、と笑ひ、やれかはいや土百姓、脚さへあれば馬と思ふが、如何に事を知らねばとてそれが馬に牽るゝものか。世界の馬のかすげとは其事とら、牽て歸れといへば本田次郎つ、と出で、忠太殿の評議尤ながら馬と武士は見掛によらず、彼等も覺えなき事は申さじ。萬一よき馬なれば君のほ爲一馬場乗ては覽もやとせせ。梶原聞も敢ずげに誠それ乗て見よ。畏まつて忠太股立はさみ、馬牽寄せひらりと乗た。掃部祐成袋笠とつて左右の腕をしかと取る。五郎は前に突立てば、人々あはて狼藉者と取廻す。掃部少ともさわがず。ア、是方々、敵討にてい必ず疎忽なされたと押しづめ。こりや忠太三島の宿にて討たりし。小柴の郡司が忤小柴掃部勝重親の敵覺悟あらん。ヲ、我は會我の十郎祐成舅の敵通すまじ。さあ勝負と手を放せば忠太心得たりと太刀ぬく所を、掃部左手の肩先より袈裟に掛て切落せば、祐成右の腕より乳を掛けて切落す。時宗ついで首討落し。さあ梶原殿目前に家來を討せて堪忍ならずは。お相手に罷ならん如何に、と呼はれば。いつかな事怪我ごさらぬと後をも見ずして逃失せ

ける。人々大きに悦び、さあに門出よし此上に。祐經討は眼前と打つれ宿所に立歸る孝行深き威徳にや富貴の家と榮えける是も目出度君が代の。しるしなりけり常盤木のかはらぬ國こそ久しけれ

賀古教信七墓廻

十王經に曰。閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る。二鳥棲でつかさどる。一を無常鳥二を抜目鳥と名づく。我れ汝が舊里に於ては、鵲鳥と化して別都頓宜壽と鳴くと云々。是ぞ和俗に聞ならく冥途の鳥や卵の花月、佛降誕ましまして、因果をしめし量りなき衆生濟度の誓願力、は法と共に文武の道、ヲロシ盛んの代と。いぢるし。往日播州の惣郡代、鹿兒川前令吏藤原教孝は、代々鎌倉の披官として家督民部省孝房、嫁君は檜室の中將種平朝臣の娘、相性吉の水と金光り和らぐ光明丸、十二歳にて其次は在鎌倉の獨寝がち、年よわ五つの千壽の娘惣領孫の顔も見ず、先立ち給ふ前妻を、思召出して教孝の膝を、放さず育てらる。二男は當奥は前の一子にて兄に劣らぬ侍盛り、花二郎教信と名乗つて廿一、孝悌の心淺からず嫂は姉甥姪は、我子の如き仁愛に似ぬ母心ひすかしに、繼子繼嫁孫君も憎やくと押出して、詞に尖る劍先舟家中棍をぞ取兼ねる。其頃大内は造營鎌倉の沙汰として、諸國に是を下知せらる則民部省孝房は、熊野山の材木を引出せとの仰によつて、去年より在京あり國より金銀を運ばせ、攝州紀州に渡海の留守目出度公用調ひて、追付歸國を祈らんと教孝夫婦花二郎、光明九千壽の娘北のは方諸共に、播磨と丹波の山境出雲の、社に、大三重參籠の、宿坊とても、奥山家、水尾の柳が斧の音に、山路の苦勞を思ひ遣り猶々祈誓をかけ給ふ。斯る處へ京都より乳母子の印南の彌七郎、同く外様の侍共歸りたりと申ける。人々如何と驚き給へば心ならずも北の方、氣遣はし彌七郎殿はなにとては歸りなきぞ。は文にてもなきかとおれば彌七郎涙ぐみ、さんい大内のは普譚大半成就いたせしが、陽明門の樺柱不足

によつて君の舟を出されしに。先月七日の難風に熊野浦にて。るか船悉く漂溺に及びし時。は草履取の須磨藏に着ては命を助けんと。傳馬船に乗せし山の様なる大浪が。ごふごうつては舟は行方知らず成てひ。たとへは命ありとも日本の地には在まじ。何面目に主を失ひやみく。と歸らんより。腹切らんとは存せしかども。先は知らせせやさん爲罷歸りひと。語りしも敢へず泣居たり。北の方を始めとして。教孝親子光明丸東西分ぬ姫君まで。母に取付聲を上げ父上戀しと泣給へば。人々夢かとはかりにて悔み。歎かせ給ひけり。令吏涙の下よりも。ア、思へば佛の咎め程恐ろしきものはなし。我前妻に子種なく。摩耶山の觀世音に願を凝し。一子を興へ授け給へ。出家させて夫婦産すの業を晴し。佛恩を報じ奉らんと誓ひて設けし子なるを。寵愛に絆されて出家になさん最とはし。月日ものびて成人し佛の契約違ふのみか。嫁を迎へて孫まで見て民部省孝房と。家督にたてし此偽り一歳母が死したるも。罰とは知れ親心。聞にはあらで子に迷ひ。兄を出家にせぬからは後づれの子の花二郎。せめて法師にせんものを浅ましや凡夫心。佛なしとは思はねど物のたまはぬ木像に。實には心の怠りて斯る愁ひを見ることよと又さめんとぞ泣き給ふ。父を諫めて花二郎は歎きはさることなれども。非をあらたむるに憚りなし某只今出家せば。兄弟は同根生兄にて民部殿。は出家ありしも同じ事にて懺悔の功徳に父母の。佛の咎めも翻へり兄上の現未を助け。子孫も繁昌致すべし。光明丸が家督の願ひ某が出家のお暇。只は急ぎいへと涙を浮べ宜まへば。老母きつと睨みつけア何をいふぞ花二郎。あの兄の民部はな。前の奥のうます殿。出家にする誓願で佛頼んで産れた子。は身を産だ此母は神も佛も手傳ひなし。夫婦のせいで悦びしに。出家にするはごならば。何しに腹を痛めふぞ物の順をいふ時は。は身は兄の跡を續ぎ民部の出家の名代に。光明丸が頭をこそげすばるばうにしたが好い。懸替もなき花二郎出家にしての徳

は何勿體なや聞きともなや。ア、南無阿彌陀佛とませこせご餘所の聞のうたてさよ。令吏は是にいらへもせず我子孫とはいひながら。家督の事はまゝならず殊に公用缺るといひ鎌倉表計り難し。是より直に上洛して。公けのは氣色伺んと。旅立雲も丹波路の栗毛の駒の知へにも。我子の便文も見ぬ。幾野の道や大江山越えて。都に。三重さしのぼる月影暗き深谷のの木葉の時雨流の音さらさら。とさつくと吹風に雲起り霧降りて物さわがしき山路かな。我が生さぬ子も子なれども何ゆゑに。うらむらさきの初草の始めの妻の猜まし。妬み暮せし年月の身は百歳の半過ぎ。頭の髪も白黒に亂れ。基石の繼子立敷へ殺さん喰殺せ。咒ひ殺せと岩根踏。苦踏分る。山樵の樵路空しき。丸木橋下は千仞萬仞の。奈落の若干の。苦思を繼子に見しめ繩。邪神をいのる小忌衣口にはへし燈明の。油煙くるく。渦巻く雲のかけ路。巖々峽々として松風梢を拂つては花を薪木に吹添えて。雪を運べる。祖傳ひ慳貪我慢の一念には。平地を行くより足輕々山神の洞に攀登り。一息ついで休ひしは宛から。鬼女の如くなり。民部省の一僕須磨藏は。主人の内意を承はり人目を忍び山越えに。夜道を故郷へ歸りしが繼母君とは思ひも寄らず。天晴れ如何なる非道者山の神を駭かし。人を害する大悪人見届けんと麓より。附登つて岩蔭に隠れてことを窺ひける。繼母は斯とも白木綿の襷の四手を打振て。謹上再拜雲が洞の山の神聞召せや聞き給へ。辱なくもは神は。昔大和の國葛城山に住み給ひ。夫より此處に移ります咒咀調伏の願を見てしめ。古へは年毎に人身は供を受け給ふとや。今佛法盛んの世なりとも。威力朽すは繼子を四海の波に沈め。自に一念の。鐵の牙を付て給へ。残る繼嫁二人の孫を喰殺し。死骸を神の供となし我子を家督に立てたまは。四季に四度の人身は供供祭り奉らん。目前利生を見せ給へ。枯木を叩き岩を踏み。跳上つて祈りしは身の毛もよだつ。計りなり聞もいふせ。空おそろしくそる願ふて立たりしが。俄

に山谷震動して山風吹生け吹下し。雲霧覆ひ咫尺も見えぬ洞の内より。火焰を吐て七尺餘りの蜘蛛の形。千筋の糸を繰懸けく顯れ「出るぞ怖るしき。蜘蛛をとつて引纏ひ六尺伸て引纏めば。あれよく」と泣叫び逃んとすれを動かさず。只一口にこそ呑だりけれ。聲ばかりして姿は見えず刀抜きかけ居たりしが。ありつる蜘蛛は忽ちに。蜘蛛と化してゆく月の影もほのかに晴てけり。さもあれ彼奴が行先をつけて見んと身を密め。遺過したる裾より一筋の糸引たり。是ぞ不思議と繰ためて。暮ひ來るとも白露の奥山道の險きに。木の根を傳ふ身も軽く這行く足もはや玉の。をのが方に蜘蛛の糸を。扣へて 三重繰返し。行くとも覺えず。賀古の庄主人の館にとまるにぞ。扱は蜘蛛御前かと呆れ。果たる計りなり。花二郎教信は父を送りて歸られしが。ヤア須磨藏か珍らしや。おこことが無事に歸るからはさぞ兄上もお供しつらん。如何にくとありければ。ア、は沙汰なし。民部さまはは歸りなしされども御命は恙なく。御家老の中務には内意あつて参つたり。大旦那様夫婦は勿論。北のほう若君様へもは隠密。頼み奉るといひすて。駈出るを引留めてこれ須磨藏。如何に秘する事なりとて兄の身の上弟の聞かぬ事やある。是非に仔細を語れくとありければ。アツア是は過つたりは物語仕らん。必ず他言遊すなと小聲になつてぞ語りける。されば貴きも卑しきも色に傾ふく世の習ひ。君は此たび公用の休息の夕なく。都九條の遊女町宮城野と申す傾城を。人に誘はれ三度は一座流の遊び。四度馴染めば五ツめは早睡まし。彌増り。先からとんとのはら坂戀の峠を打越して。引に引れぬ義理づくも後は互の嘘なしに。身を任するを不便がりそれがこふじて憐れがり。後は苦勞を引受ては身のひしといきつきて。通ひくづをれ給ひし程に早金銀の矢種も盡き武家の間へ大内の御用も缺る廓に急ぐ。京の外開國の耻切腹といひしを。某が計ひにては内衆へも知らせばこそ。難風を幸ひにさる浦方に漕着て。海士の管屋の住居餘所の

藻汐の烟さへ。此方に立たぬ朝夕を執權中務に密に語り。合力受歸れとの仰せにて忍び参りひなり。申すも便なき仕合と今更袖を絞りける。花二郎聞給ひは痛はしやさりながら。それ程のは艱難中務までもなし。一人の弟なりなど我等には知らせもなき。腹異りとの隔かや曲もなきは心ど。恨み給へばいやく。は繼母とて隔て給ふはは尤。夜前某雲が洞を通りしに。母君一人さも怖ろしき扮装にて。繼子繼嫁孫をも殺し實子に家督繼せて給へど。調伏の願立に悪神の験しにや。忽ち山荒れ御繼母の。一念の絆の糸したひ参りひ。といひも敢ぬに花二郎南無三寶と横手を打ち。エ、淺ましや耻かしや。大悪心の母ゆゑに北の方光明丸に。不慮の難儀出來なば兄民部殿に疑はれ。世間共に言譯た。ず所詮存命へ益もなし。是迄なりと腰刀するりと抜き。既に自害と見えし處を須磨藏繼て暫く。これ申し御心底は至極ながら。天晴大事の御命御身に取ては。討たてかなはぬ親の敵の御座ひ。御存じなきは御道理それを如何にと申すに。もと母君は都人。坊門の中納言といふ公家方に宮仕へ。其時に懐妊ありし是れ殿は公家の御子ぞや。未だ胎内に在ます時分。實父中納言殿國司として當國へ御下り。諸人の訴へ聞召す中に。非道の判きの恨みによつて。御父中納言殿は聞討に討れ給ふ。それより母御は此屋形へ御入あつて奥に立ち。これにて誕生ありし故か二川の二男とはなり給ふ。とても死なんす命ならば誠の親の敵を尋ね。差違へんとは思さぬか。エ、肝甲斐なきは所存と様を制し教訓す。花二郎手を合せよくも知らせし難有さよ。今の親の名字をつぎ養育の恩深けれども。誠の親の敵を持て。討ぬは畜類同然たり。命限りは狙ひ付討ての後には立歸り。名字の親の孝行なさん敵の假名實名は。中務が知つらん病氣によつて私宅にあり。直に立越え相談して時を移さず打立たん。命あらば兄上にも對面せんと申てくれよ。淺ましや今迄は一ツ胤ぞと思ひしに。親と頼むも他人なり兄といふも他人なり。誰をかしの泣よりに誠の母は悪人

の、身の行末も覺束なしとかこち「出るぞ道理なる斯る處に、門前に響の音頻りなり。須磨藏はつと身を隠せば繼母の弟熊源太、供人引具し來りしが馬上より屹と見て、ヤア己れは須磨藏か、難風に吹流され民部省諸共に、行方知らずと披露せしが、偽るな下郎め間牒を入れて聞きたるぞ。民部省は遊女に溺れ御普請料を掠侵し、身の置き處なき儘に難風に失せしと偽り、脱落したると聞けるが、疑ひもなく合力受に來りしな、それ懐を探して見よ妻子の方か中務へ、文のあるに極つたりそれくと下知すれば、郎等共兩方より懐へ手を入る、悪しかりなんご振放し、男たる身のいき懐へほでをさすは何事と、言捨逃るを熊源太元首押へて、ヤア身が言付るに推參者はやく探せと武者振付、今は斯ふよと文取出しすんく引裂て、口に入れてぞ噛たりけるすは顯はれし搦めよと、取付處を取ては投げく、足に綻れば蹴散かし腰を抱けは振放し、前にかゝるを踏倒し拳を堅め寄付者の、眞向打て打廻し此處を先途と三重はげみしが、大勢に組付れ、脇指撃れ大童散々に踏伏られ、難なく繩をかりしは無念なりける次第なり、猶拷問して問ふ事あり牢に入れよと引立れば、須磨藏眼にかどを立て身の程知らずの劫人め、鶏犬の類迄餌を飼ふ者には従ふぞや、所領を承るからは民部様は主ならずや、斯ふ云我も御扶持人犬も傍輩も傍輩、此有様は何事ぞエ、口惜や是非もなや、己等兄弟はびこつて民部様の御妻子、殺され給はんおいとしや奥様は何處にぞ、光明丸様若君様なふ姫君様様と、呼はり引かれ出けるは無殘「なりけり痛しや、兄弟の人々はあれ須磨藏が聲として、我々を呼ぶはいの嬉しや父の御歸りと、兄弟表に駆出てヤレ須磨藏よ、父上は何國にぞ何故に隠れ給ふぞと、あらぬ隈々隅々を尋ね廻れどあらばこそ、なふ悲しや千壽の姫御身や我があけくれに、父を呼ぶのを面白がり茶道坊主の珍齋めが、欺して呼んだものさうな侍の子といふものは、返らぬことをくよくくと泣けば人が笑ふぞや、我も泣まいな泣やんな

と涙を隠し妹を、笑顔して慰めしはおとなしやかに哀れなり、奥より繼母は色々の花折持てなふ孫達、餘所の小供は親よりも祖母を慕ふて抱かる、如何なれば和比前達は祖父祖母同じ事なれど令吏殿には抱かれても祖母が膝へは寄付ず、孫を持たも名ばかりでいたいけらしい顔も見ず、いとしの者や可愛者サア誰なりと此處へ來て、祖母様いと抱付たら此花やらふと招かる、若も何時なき祖母様の御機嫌よしと悦べば、姫は膝に駈上り祖母様いと首筋に、抱付いてあまへしは危うかりける次第なり、繼母莞爾笑顔して、能ふ抱れた出來いたな、とても事の事に、脱で祖母がほかに抱かんと、我も大はだずんと脱ぎ千壽の姫帯解き、衣引剣で裸身を兩手に取て差上げ、いたいけ盛りの花の顔頭を口に押込めば、口耳際迄きれあがり肩も腕も一口に、血を吸ひ呑だる其いきほひいたはしや姫君は、足を縮め苦しみしは目も當られぬ風情なり、からだ半分胸中まで呑むには程もあらばこそ、股より膝口瓜先も残さず終にぐつと呑み、腹は毬とぞ張たりける光明丸は氣も付かず、花に見入ておはせしが振返つてあれ、なふ、千壽の姫は祖母御前に喰殺されたど、叫び給へば忽ち姫の姿と變じ、エ、兄様何を騒がしい、祖母様は先刻にはやお部屋へ歸つて寝してじや、いさ此花でまゝとて遊ぶまいかと、花に戯れ引むしり際もかな若君を、取て呑んと眼をつけて只後背へと立廻る、眼の光り左右の牙人間ならぬ顔色を、見つけば命も絶ぬべしそれとは知らねと若君も、ぞつと身の毛も立上り逃んとすれば兄様と、をはへ纏れて追蒐る、猶怖ろしさ詮方なく、小太刀を抜て拂はるゝされども怖るゝ氣色なく、さつとはづしひらりと飛び宛から飛鳥の如くにて、あれ兄様のと喚く聲中務が女房卵の花、あはて駭き走り出で、太刀奪取てこれ若君様、又は兄妹争ひか、殿様は無し中務は病氣なり、構人ないどて餘まりな怪我ばしあつてよいものか、いとしばなげに小姫様此方へくと抱き上げ、機嫌を取て賺しけるおちや乳人の癖として

背に子を負ひ寝させて置ていんの子とゆたもなめなかけそ。こゝな子は幾歳。十三七つ。七つにな
 る子がいたけいな事云た。殿が欲と唄ふた其咽笛に飛付て牙を立て、ぞ食しめける。なふ悲しやと力を
 出し引け共、放ればこそ。牙は肉を貫いて血は瀧津瀬と流れける。何事やらんと北の方長刀提げ走出
 で。物の魅か淺ましやと石突取延べて。丁々と打給へば打れてかつはと落けるが。忽ち屋鳴り鳴動して
 鼎の如き蜘蛛となり。軒を翔り長押を走りをめき渡を渡せしき。頭のはづれに長刀の。切先を打込まれ。
 はふく逃延び繼母の肩。壁を穿て其儘に形は失せてなかりけり。北の方は卵の花が傷をいたはり給へ
 ども。毒蟲に急所を喰れ終に敢なく絶入けり。繼母はひたひを切下げられ。廊下桁椽踏躑かし大聲あげ
 て。ヤア、嫁は前。如何に繼しい中とても姑は親ならずや。長刀持て追廻し額に創を能ふつけた。長刀
 は使はねど劍まさりのはを持た。くらひ付てのけたいな熊源太は何處にある。あれ引出して討て捨てお
 りあへ出合へとわめきしは。さつきの雨の山川につゝみのされたる如くなり。心得たりと熊源太家中一
 味の端武士。雲霞の如く馳集り北の方も若君も。一所に討てと奔めきける今は斯うよと北の方。長刀取
 のべ戦ひ給へど。大勢に女の方かなはねば。既に危く見ぬし處へ中務秀光。病中の枕の刀一文字に殺倒
 し。真中に駆隔て大音上て。ヤア不審なり熊源太。只今屋形の騒動は屋敷に化物棲んで。小姫君を喰
 殺し我女房も相果しと。聞や否や駆付しに案の外に方々が。北の方若君を害せんと取巻は。ヲ、さては
 姫君を失ひしも繼母姉弟よな。化物ならばをんぞろか假へ誠の人間にても。手なみを見よと太刀差騎し
 討てかゝれば北の方も長刀構へ。我子の敵餘さしと。討てかゝれば變化の繼母只陽炎の如くなり。秀
 光は病中なり北の方は女業。熊源太が大勢を腕一つにて防ぎかね。數箇所の痛手を受けながら此處に支
 へ彼處に堪え。龍虎に優る熊源太。二三度表へ駆散し火水になれとぞ。三戰戦ひける時に繼母は。光明

丸を引摺み梢に糸線懸け。虚空に飛ばんとすがきは危かりける舉動なり。斯うし處へ須磨藏は縛
 られながら駆付て。南無三寶ともがけども高手の繩の強くして。爲べき様もあらざればヤアをのれ喰ひ
 付て留めんと。くるりくと大庭を彼方此方へ追廻し。追詰て繼母の弱腰しつかと咬へ。齒骨も切れよ
 と引たりけり。繼母は命を遁れんと足踏しめて前へ引。とゞろくとどどどと遣つ。戻しつ遁れつ留
 めつ白洲を蹴立て引合しが。熊源太取て返し須磨藏が胸中を。縛繩の結目を掛ばらりすと切下げた。
 腰より下は落ながら念力胸に生留まつて。繩は切れたり手を伸ばし若君の指添抜持ち。突留めんと繼母
 を左手に摺んで捻合ける。時に秀光北の方よるほひ來つて。熊源太を追散し繼母に打てかゝりしが。忽
 悪風黒雲覆ひ七尺餘りの蜘蛛と變じ。なほ若君を放しもやらず胸半分の須磨藏が。念力は死もせず純付
 を事ともせず。虚空に千筋の糸を張り雲をわけて攀上れば。電光げきして雷神天地も崩る。三疊ばか
 りなり蜘蛛は空にて。若君を呑んくと働けども。凌ぎかねたる刃の光。半身の須磨藏が。變化に優る
 不思議の力蜘蛛の真中刺通し。弱る處を腕切落し若君を擁抱さ。八重たつ雲をくるくくくくるり
 くと舞下り。大地へ墮とおちこちの變化は亡び失せければ。須磨藏が半身は若君をおろし置。さも嬉
 しげに死顔も眠れる花を姿みける。北の方中務煎つたる種の生ひ出て。石に花咲く拾ひ物蘇生りたる
 若君の。悦びに猶姫君のいたけ盛の花は散てかへらぬ憂涙落行く夜半も深手は負ひぬ。目もくれなる
 に暗き夜の足は。たゞく身はよろくと互に呼續き呼かはす。聲を知邊の千鳥啼く淡路の。方へと落
 にける

花の盛は冬至より百五十日、又は彼岸の後七日など、はいへど立春より、七十五日大様は遠はずと。斯る事にも氣を付て見付書付留めにし。智者の目鏡を違へては田舎花とて京吉野。奈良や初瀬の名木の笑はい、嘸な花の名も。惜や牡鹿の津の國の櫻塚こそ盛りなれ。太平の世の民草の、女子勝なる花鳥の、天も色にや酔ふたさ。酔ても抜ず切らぬこそ治まる御代のめいのあたひ。千金の春べ哉。此處に當所の隠士高梨吉内左衛門友重は。播州揖穂の住なりしが、一門中に所領の爭論先年國司の裁許暗く、重代の傾知に離れ、引籠り居し柴の戸も、吹荒したる花に風がいさのせきの何時の間に、鬱氣の病日に増り、今を限りと衰へて頼み少くなりけるが、花より先も、知らぬ身の、せめて此世の名残とて、介抱の女の童一僕に手を引れて、木陰に僅の床を設け往來の花見に暫しが程。氣を養ふたる春の野や、暮に立たる歌比久尼舞まひ物真似さまくの、賑ふ中に編笠被て錫杖ふり、櫻盡しの歌祭文一錢と、こそ申ければ、看病の下女下部お氣晴しの御養生。一ツ唄やといひければ、あつといふより扇を開き、口覆ひしてぞ諺ひける。

實古教信七巻

櫻のいん

そもく、敬て花を、眺め奉る、上は梵天、山櫻下は、次第に咲く櫻、忝なくも此國の、開き初たる初櫻伊弉諾伊弉册二もとの、連理の櫻靡き合ひ天の、橋板櫻板、薄き契りの子櫻の三歳足立ち給はねば天のいはくす釣舟に、下すや釣の糸櫻釣た姿の櫻鯛、蛭子素盞雄八雲たつ出雲八重垣、八重櫻さてはく、さては神明伊勢櫻、天の窟戸は大日の朝日櫻や月讀の、有明櫻、雨もいや風もいや、淺間の蘇の宮居より、見ゆるそ富士の雪櫻、都の地には、先王城の地主の櫻に稻荷祇園の薄櫻、一重櫻をお手に、手に

く、手鞠櫻の一枝は、折て手向の加茂たす、北野は連歌の花の本嵯峨に櫻場大明神、毘沙門天の遷ります、鞍馬の山のうづ櫻、正月一の虎の尾櫻これこそ、花の御縁日扱津の國に至つては、難波の岸に跡たれて住吉、四社の花神樂和歌を守の宗匠とて西行櫻色深き小町櫻も老ぬれば、身は百歳の姥櫻若木櫻のあしだの笛に、寄來るく、鹿も寄來る綜交せ、素交せ、櫻結びの花かづら、繋ぎ留めん普賢さう、普賢は流れの身を守り、ふはと打乗る雲井櫻にしつたんく、たんくたんに馴合、きれとの文珠、現じ給ひて兒櫻、これ佛神の御方便、猛き熊谷櫻さへ、墨染櫻諸共に到り到らん彼岸の、彼岸櫻は有難く説や御法の庭櫻、熊野は三つの御山にて新宮本宮、同じく那智の滝櫻尾張に熱田の御社は、異國の美人と名に高き、揚貴妃櫻を勸請ある、近江の國には、唐崎志賀の山櫻、又北國には立山白山たい山ぶくん、武藏に神田江戸櫻湯島はたのもの天神より、また御鎮座は遅櫻又櫻田の大明神、奥州に至つては、松島六社鹽釜櫻の大明神、惣じて日本國中に八百萬の枝社、讀むとも盡ぬ真砂櫻の數々は、あわ三石の米櫻勸請、申し枝下し奉る、抑それ神すしめの宮仕の、左近の櫻が烏帽子櫻を傾て、乙女櫻の小忌衣肌に、白無垢淺黄櫻に、蒲櫻、櫻重ねの袖翻へし、さかて櫻に白木綿褌引かけ、つ、かけ、花の木陰を拂淨め奉れば、惡鬼惡魔もすつきりく、きりかやつ、來るまじきは、天げんにては火櫻や又煩腦の大櫻、惡事災難只りんく、そもこそ、崇りをなすとも只今の、御方便のくりきを以て繁昌の、御しゆえんとぞ諺ひける

花見の貴賤幕の内さて聞事や面白し、かはつた祭文あるならば所望く、とわめさしに、彼の男笠脱棄て裾端折て大音上げ、これく御邊は高梨吉内左衛門友重よ、我こそ先年其方が關打にせし坊門の中納言資雄が一子、親の敵ぞ覺悟ぞあらん、サア抜合て勝負せよ、一寸も退せじと間近く寄て詰かくれば。

實古教信七巻

すは敵討ぞと聲々に。幕辨當を踏散らし群集の騒動夥し。吉内左衛門起上り。坊門の中納言殿を手にかけし友重は我なるぞ。左右に敵を持たながら名字もかへず人目も忍ばず。群集の庭に面を晒す某が何しに卑怯の働きのあらん。殊に病中手足も立たず。何を見苦しく立はたかつて。遁さぬ道ぬと無禮の舉動。弓馬の法を知らざるか。あはれ討手の來れかし見事に死して名をあげんと待たる事の仇となり。汝等如き武骨人に此首は惜れど。サア取らする寄て討て去乍ら。坊門中納言殿には子も兄弟もなかりしが。定めておのれは下人よな。何如真直に名乗らぬとはつたと睨んで叱りける。實にこれは過つたりと。かち下げを下し手を束ね。心ざしの過分さや不審晴しやべし。某は中納言が妾腹にやどりしが。討れし節は胎内にて父に別れ。母にてひ者某を身に持乍ら。播州賀古の令吏に身を任せ。彼の方にて誕生し賀古の花二郎教信と名乗。父の令吏が養育にて誠の父のあるとも知らず。年月を送りしに不慮にかくと承り。切に親の懐しさ。寝ても痛ても忘れられず。勿體なや思深き今の親まで煩くなり。昔の祐成時宗は祐信が子となつて。曾我の名字を継ぎけれども父の河津の敵は討。我もそれによも負じと無念さ口惜。胸に徹り骨に沁み恨みの刀一太刀と。狙ふ心の走り過ぎ無禮の至りは免あり。勝負をとげてたべかしと落涙。してぞ語らる。友重もや涙ぐみ。いはれを聞て笑止やひ。斯く孝行の心ざし承らば疾くに討れ。心をやすめやさんものを。和殿は一生親知らず。我は生れて三十年今日まで親に添ふたれば。思ひおく事さらになし打て本望遂げられよと首差。延べて待居たり。花二郎眉を顰め。これ友重今の詞は心得ず。此分は生れて三十年父は討れて二十一年。よも十歳にて討はせし仔細を聞んといひければ。友重はつと思ふ氣色にて。ヲ、武士の子の七歳八歳にて高名するは珍しからず。よし十歳にも百にもせよ。中納言を手にかけし親の敵は外になし。よしなき猶豫をせんよりもはや討とぞやける。花二郎猶も

承引なく。いや如何にいふてもは邊敵と思はれず。人違へさせ後代に耻かせんとの底意かや。とても。の情に本意を包まず明してたべと。手を合すれば涙を浮めわりなくも問ひ給ふ。今は何をか包むべき。中納言殿を手に掛し。誠の吉内左衛門友重とは我等が父。今北國に過塞す。某は一子政太郎友重とて元來我は養子なり。實の親と養ひ親と遠親類の其中に。所領の論のひひしが中納言殿國司のとき。非分の判きに知行を失ひ其恨みによつて養父吉内左衛門が闘討に討て立退きたり。實父は養父の公事相手正しく所領の敵なれども。我には聊か如才なく猶あはれみをかけらる。我も亦乳房より膝懐を汚したる。養育慈愛の高恩は誠の親にもかへがたし。此報恩に厭足らず父に隠して某こそ。高梨吉内左衛門友重と假名をし。討れて父を助けん爲徘徊したる其内に。斯る大病引受て只今にも相果なば。跡にて父が討れんかといよ病募りしに。今日邊に出逢ふ事。討手より猶討れ手の。某が身の幸ひは邊は誠の親への孝。我は養ひ親への孝。實子と養子と變れ共子といふ文字は同じ事。孝子の心と思ひ知り父を助けて某を。疾く討て給はらば生々世々に忘じと。涙に咽ひ頼むにぞ岩木にあらぬ花二郎。痛はしく哀れなり心底察し入るからは。望みをかなひすべし此分はいさたる親への孝。我は親の顔を見ず。羨しの上やと悲歎の涙にくれけるが。飛しさり涙を拭ひ。禮義はこれまで親の敵参るといへば。心得たりと首を伏せて待たりしが。又花二郎頭をふつて暫く。此分が望みを叶ふるからは此方も望みあり。腕もかなはぬ病人を討ては死人も同然なり。養生加へ快氣を得て一太刀合せくれぬかといへば。ハテ渡し置たる一命如何様とも勝手次第。去ながらもし此分にて病死せば。跡にて父を討まじきか。ア、いふにや及ぶ正八幡も照覽あれ。は邊を除て外に討べき敵はなし。但病死するならば早速に注進せよ。随分養生頼むといへば。何がさて其方より預る命。大事にかけて養生し。漸く勝負せん。ム、嬉し、頼母し

、醫者をもかへて養生し。本服して討果さんたとへ討ても討るゝとも。親孝行の手向の勝負差術と笑ふて死ね死なん。風にあたるな身を冷すな人參入らば言送せ。さらばくど別れける所存の。はむこそ三重比のなきはや暮渡る。山蔭の中務秀光は。我身に數箇所の創を蒙り懐妊の北の方。殊に臨月楯の上。光明丸を相俱して淡路方へと落けるが。先々追手隙間もなく又都路に行月の。熊源太が追手の者ま。つしくらに成て追駈たり。秀光今は詮方なく浪人めきたる一搦。屈竟と中務走寄て案内し。近頃粗忽千。萬乍ら仔細あつて斯の如く。手を負ふたる我々。追手厳しく遁れがたき仕合。某追手を防ぐ間足弱を暫しが程。影を隠し給はれかし頼入るとぞやける。友風床の内ながら。は覽の通り病中殊更故障の事あつて。且はお爲も如何なり。は宿は叶ふまじと情なげにぞ答へける。中務無興氣に。は惕惻隠は仁の端頼まぬ。ても侍の。斯る哀れを見るに忍び給はんや。は身に難儀はかけやさじ是非に暫しのは憐愍。頼みやすと云ければ。ハテ頼まるゝ程ならば。難儀を顧みるべきか某は敵持。討果す約束にて人より預る大事の命。若過つては一分たゝず。後れたりとて笑は々笑へ。ふつとかなひやさぬと戸を閉て。させてぞ臥にける。エ、よしなき腰抜頼みかゝつて隙費し。何國へ落どいふ處へ。熊源太が追手の者數十人。山蔭森の樹蔭より一人も餘すなど。一度に突てかゝりしは潮の湧が如なり。痛はしや北の方憐れ今迄は何卒都へ落上り。若を祖父御の手に渡し。自も安々と。胎内の子を悦ばんと憂目を逃れ落延し。其甲斐も情なやなふ中務人手にかゝるも口惜し。胎内の嬰諸共。妾を害し光明丸を出家にし。佛の契約立てたべと聲を上てぞ泣給ふ。ア、お心安かれ若君をお供し。追手を切抜け何方へも落延び。は出家なさせやすべし奥様は是に御隠れあり。敵ちつてもひはゞ都父御の御方へ。落させ給へと花見が捨し藤取被せ忍ばせて。寄來る追手を弓手に受け馬手に支へて切拂へば。若君も甲斐なくしく中務に引添ふて。大勢

に切結び追返し追戻し麓の岡邊に。三重追ふて行く此音に友風は下人共に手を引かれ。這々垣に取付て見送れば二人の者。大勢に取巻れ今を最後の有様なり。ハアア、不惑や危し南無三寶。我花二郎と契約なくば最前かくまへくれんずもの。人に預る命でなくはこの病でも一方の。助太刀してやらんものを命が二ツ欲さやと。拳を握り齒を鳴し身を顛はしたるばかりなり。熊源太が弟虎平次。取て返し女が見えぬと吐きて。木草を分けて探せしが。藤の下を怪しげに。引除れば北の方わつと玉ぎり手を合せ身二ツになるまでの。命をくれよと泣き給ふを引寄てあばらばね。三刀四刀刺通し返す刀に笛のくさり。づたづたに切散し死骸は遙の谷川へ。ゑいやつと投込んで。悦び飛で出けるは傍若無人と謂つべし。友風今は堪りかね以前彼等が耻しめし。怖惕惻隠忍ばれず。花二郎が恨みをうけて受けのめ。生ては置れず手鎧おこせと杖に突き。よるぼひく聲をかけ返せ。盗人奴ら。遣らぬくど勇めども長病ひに足立たず。エ、口惜いな無念や臍が動かぬと。彼方へよろく此方へだちく。踏挫いては膝摺刺き。立上つては脛を揉み。心ばかりは早瀬川急來る痰火に息切れて。のつげに反て絶々の今を最後と見えけるが。エ、脆きは人の命ぞや義理も仁義も腕だても。病には勝れぬかや。残念なり花二郎斯と知らば最前に。一太刀合す真似をして本望遂さすべかりしを。武夫の義を重じて頼む者をも匿はず。武士の命を徒らに病ひに死する本意なやな。諸佛菩薩の力にて我死する我壽命。残れる親に授けてたべ。南無阿彌陀佛の一聲に此世の息は絶てけり。下女人駈付て呼助け。薬さまく用ゆれども其甲斐更に亡骸を抱きて奥に入相の鐘に散りゆく花よりも。脆きは諸行無常の風はげしき。世には。三重とやまらぬ。水行末は。なる小川。北の方のなきがらはいせきに流しかけられて血汐に染むる棚は。流れもあへぬ紅葉ばど。あはれはかなき風情なり。痛はしや子を思ふ恩愛苦輪の川波に。生死五蘊の泡消えず胎内の嬰兒

は。あばらの疵を出身の。門と頼みて初産上げ誕生「あるこそ不思議なれ死骸に取付。乳房を尋ね泣叫べば口に入る。水わけ柳枝垂れて浸す梢を便にて。あこがれ出る母上の魂は青柳の。青き火焰とつたひのぼるを嬰兒の。目には母ぞと泣慕ふ母はおもひに寄れば消え。退けば燃つゝあてがるゝ。柳の糸の力なき親子の中を痛しき。既に夜半の鉦鏡鉢友風の葬送とて。親類下人隣家の人々心ざしある野邊の供。光明遍照の天蓋は十方世界の雲に覆ひ。念佛衆生の旗の脚攝取不捨の風に靡かせ。欲生我國の提灯に不取正覺の輿を照して。中山寺へと送りしはさながら安養寶國に。生れつべしと頼しく心意も澄る折からに。山風しきりに梢を鳴らし河瀬の音は撃々として輿盤石を撥ふが如く後へも前へも動かす。供の面々身の毛をたて怖れ戰慄きたつたる處に。北の方の魂の火焰は鳥の飛ぶごとく。輿に入るよと見えけるが棺柳搖き鳴動して。棺を四方へ打破り亡者頭はれ出たりけり。わつといふより輿昇役人旗天蓋も投棄て皆散り。くごぞ逃失せける。いたはしや北の方友風が骸を假に此世に立歸り。柳に縋りし嬰兒を。手繰り寄せつゝ抱上げしは涙にくれけるが。世上の産の習ひにて子は生れて母は死し。子は死して母生きたる例しはあれど。母身と我は如何なる因縁因果にや。かく淺まししの産養ひ誕生は佛に似て。餓鬼道の孤兒かや母が肌にはつけずとも。おちめのもとにも抱かれず。行衛も知らぬ男の死人の骸を借り。いたげばさすか魂は親子と知つたるしにや。冷へちぎつたる亡者の肌は母と思ふて抱き付。ア、命あるならば母が誠の肌は付。悦ぶ初聲聞へさるるを慕なき親子の契りやと。なげけば産兒も聞入てやわつと叫ぶを捨りすかし。ゆりすかしては我も。亦共に涙の中山寺辿り行くこそあはれなれば寺の門に。たゞすみて此世を去りし者ひ。上人様に合せて給べしきりに敲き呼はれば。待まうけたる寺僧達よりや非禮よと用意して。真如上人大衣を着し門を開かせ出給へば。友風の死姿嬰兒を抱き立たる體わつとばか

りに御弟子達なふ怖や南無阿彌陀。阿彌陀様地蔵様。助けて下され幽霊さまと頼ひまはるぞ道理なる。上人掌を合せて。淺ましや友風無始の煩惱は雪を削る。摺屑五蓋離散して梅檀の烟に伴ふ。色心の當體皆是阿彌陀佛と示し給へば。差俯向き涙をばらりと流して。いや友風にてはひはず。耻かし乍らみづからは播州賀古の令吏が嫡子。民部の省が妻侍ふ。繼母といひ姑の賢しき嗔恚の牙にかゝり。稚き娘は喰殺され妾も共に死ぬべきを。兄の若がいとほし又は此子を産まん爲。痛手も重き身を持ちて此處迄落延しに。悪人に見付られ身は寸断くゝに魂も。宿る方なく斬割れ體を離れし嬰兒の。犬狼の餌食にや餘りの事の悲さに。上人様を頼まん爲男の骸をかりそめにも。女の魂罪深く此亡者友風の。往生の妨げ妾が業は彌増の罪障思ひやられたり。去ながら我身は三途に迷ふとも。此子が行衛を上人様偏へに頼み奉る。淺まししの親子の態憐み給へと泣叫び乳房をしばれば悦びて。口に哺むを搔撫て。泣つ賺しつ寵愛は不思議とも又哀れなり。上人御手を拍ち給ひ。さては賀古川の一族かや。昨日の暮程賀古川の執權中務と申す仁。光明丸を連れ來り愚僧を師匠と頼みし故。則ち子弟の契約し夜前髪をも剃せしと。語り給へばなに若は此お寺にとや。法師顔を見せて給へ中務よ秀光よと。奥へ入るをこれく。其中務といふ人は北の方を尋ねるとて。直に寺を出でたるぞ又新發意との對面も。御身まことの姿ならず此世に住む身でもなし。稚き者に歎きをかけ菩提心の妨げ。御身も迷ひの種ぞかし。今客殿に臥てあり。餘所ながら御覽せと遣戸を細目に開け給へば。痛はしや光明丸床を枕に剃立法師。疲れ寝入りし味氣なさ。あれは我子か不感やとわつと叫び入りけるが。ア、いたくしの寢姿や生れ落ての昨日まで。お乳が手にさへかけさせず母が抱添ひ寝させしに。此山寺に只一人見すばらしげにしよんぼりと。頭に風の染々と日敷立程父母を。慕ひ歎かん可哀さまと伏沈みてぞ嘆かるゝ。ア、いとほしや母は魂ばかりでも。餘所

ながら寝顔を見る御身が母を見る事は、今生にては叶はぬぞやれ夢には見えぬか物を言へ。出家成就學問して母が成佛自在を得ば、又來る世には又親子と必ず生れあふべきぞ。なふ上人様あの子は未だ抱瘡せず。殊に初の子ひはづ者毒劇して息災に、介抱頼み參らす。名殘惜の我子やと。五體を擲ち身を悶え。聲を限りの悲歎の涙。世に絆しなき上人も恩愛親子哀別離苦。思ひやりつゝ、御弟子達衣の袖をぞ絞らるゝ。花二郎教信は親の敵病死と聞き、實否を正し極めん。門前に走着き。斯と案内請ければ幽霊は耻しげに、それぞ妻が小姑よと隠るゝ體をちらりと見て、會釋もなく突入り小腕取てこれ腰抜の表裡者。おのれを誠の武士と思ひ身の孝心に引當。親を助けし義理を忘れ、病死と偽り葬禮をまなび此姿は何事ぞ。おのれ如き甲冑者に義理も瓢箪も入らばこそ。サア葬禮は仕舞ふたり直に土へ切込んと。討てかゝれば上人御弟子絶付。詳しく仔細は知らね共友風病死に極りて、葬送のきざみ賀古川の北の方悪人に害せられ。其魂假に宿つて愚僧に願ひの仔細あり。前代未聞の不思議なり必ず粗忽なざるゝなど。始終を語り給へども花二郎得心せず。それは我らが兄嫁末世にさることあるべきや。其處退き給へと討てかゝれば。幽霊涙の下よりも。なふ左のみ疑ひ給ふな形こそかはるとも。聲は聞知り給ふべし其證し見給へと。襟を開いて乳を搾り疑ひ晴れて我子を助け。跡吊ひてたび給へといふ聲ばかり魂は。去るよと見てなきからは花の枯木と伏しにけり。はつとばかりに花二郎言語を絶し感せしが。誠に思へば一日に親の敵と兄嫁と。譬と情の無常を見るこれぞ出離の智識ぞと。抜たる刀を取直し鬚切て教信の。文字を其儘教信法師と戒名し。此嬰兒は甥の殿我手に育て叔父甥の。連同心と抱上れば上人も合掌の十の蓮花や九ツの花の臺の花の露。南無といつば是歸命阿彌陀といつば此行。此義を以てのゆゑにこそ則ち此處も唯心の。淨土と聞けば吾心の彌陀。南無阿彌陀佛と十念もおりて。里へぞ歸りける。

第三

河舟をとめて逢瀬の波枕あげて逢夜のさし枕。たとへさす共。障りあり共。押ていこやれ神崎の。く町は。歌仙が右左。以上卅六格子揚屋の数は十二軒。四季に名高く都をも。下に瞰下す鷹金屋。冬には雪と結綿屋。春咲初むる梅鉢屋今は五月のおしなへて。軒の菖蒲や蓬ふく端午の禮の初給。今日ぞ廓の衣更。夏來にけらし染けらし。模様は京と難波津の。中を取たる小つまのふきに思ひ。ふかせてすらりく。歩みつれ。一家くの花盡し。戀の早苗もうら若き若衆が身装禿松。深い餘りの口説文淺さを招く屈文。心さかせてそく。の。風を見合す引船や揚屋く。の門に立ち。轆甲に長刀や鴛婦が腰のかぎ迄も。今朝の祝儀の口明と笑ひ。賑ひのめけり。中に無殘や宮城野は。京のくつわの年の中又此廓に賣渡され。再び此處のしんさうとよいことがましや面目も。涙まじりの道中は。さすが名におふ流れとは。水際立て知られたり。鴛婦のまきは大聲を揚屋の門から高笑ひ。これは宮城野様とて元は京の大夫妻。跡の卯月八日から此方のしんさう様。身代よしの粹大盡心のきれたさばさての。鴛婦に澤山物くれるよい客様を千人はぞ。つけまして下さんせ頼みますとぞやける。神崎一番の大揚屋。かけ作りの長表迄迎ひに出。是はく宮城野様。此里へお下りといふより早く。度々呼びに進すれ共。大夫様は殊の外客の御吟味なさるゝとて。一度もお出下されぬは。少とお恨みに存せしに。不思議の今日の御出は三千年に花咲く天竺のうごんの粉。のく。のく。辛の粉。のく。のく。娘の子是はかたじけ有馬山。あなの小笹の粽の節句。祝ひませんと伴ひ座敷に通りけり。宮城野は猶物思ひまことに數ならぬ此身をば。御持難しは嬉しけれ共御聞及びもあるべきが。賀古川民部様とす御方と。廓はおるか京田舎

はびこるほどの浮名たち。おいとしや大名の國郡をも失ひて。生た死んだも知れぬ様に成行き給ふも我等故。それに如何に勤めて此神崎まで賣流され。繁昌の全盛のといはれて譯の立つべきか。揚屋の道も忘れる程すたつてころは宮城野なれ。とはいひながら親方の難儀を思へば節句しも。内に居眠り居る時は。茨の蒔に居る如し。思へば佗しき此勤。夫に染りて馴るればこそ愛身を常と暮せしと。涙に咽ぶ。風情園原吾妻や若紫。一家の遊君もろ共に。皆々袖をぞしぼりける。亭主も共に涙ぐみお道理。アそれにつぎ節助の廓に御座なき事。此處の慣ひにて五月喜蒲の節句には。深いお客のお方より。轎兜を御進上。宮城野様の節句始お馴染なくばどうぞ又。やり手衆も氣が注かぬと頭を掻いていひければ。ア、さればいな豫て左様に承はる。如何せんと思ひし處に此頃可笑い事あつて。行衛も知らず名も知らぬ美しい小坊主が。格子迄をり。見え幟もくれんと約束し變つた咄があるはいなどいふ折からに横町より十二三なる小法師の紋紗の衣に紅の袖裏。編笠深く顔忍び亭を見上げしく。衣の袖を顔にあて思ひ入てぞ泣居たる。ナア只今言しは彼の子の事といへば一座も不審を立て。出家といひ稚き身で戀のあらん様もなしと。長立出て是ぼんさま。折々格子へ見えると聞く殊に今の涙の體。尋ぬる人ばし御座るかといへば法師涙を押拭ひ。ム、其方は傾城賣る人か。あの宮城野といふ傾城を。己に負て給らぬか此頃さう。直切れども。坊主には買らぬとあるそれで幟を約束した。これ此方の寺の靈寶徽宗皇帝の鷹の繪。此懸物を幟にして。其代りには宮城野を。一つ負て下されと。手を合すれば亭主を始め掛簾禿手を叩き。扱も變つた大盡と一度に既とぞ笑ひしが。中にも園原哀れがり。何れも御覽せわらべ氣に。大事の寶物盗み出し女郎に逢たいとや。去ながら宮城野様がかなはずは。外でも大事ないかといへば。ア、忝し有難し此方なりとも買ませう。賣て下され頼みますと手を摺り。頭を下げ口説にぞ。然らば

すぐに床取て抱て寝るが合點か。法師不思議な顔付にて。ム、傾城買ふには抱れて寝ねばかなはぬか。我等は元武士の子。三歳にて乳母が。懐離れしより。女子と寝た事なれども兎も角もいたさんが。抱れて寝れば後生になるか。菩提の種かと問かけられ園原もおかしさに。ヲ、後生ども。傾城の懐は極樂安養淨土に表し。床に入るは極樂の樂門に入る心と。戯を誠の稚な心五體を投て感歎し。扱こそ佛に妄語なし人のいひしも誠ぞや。今は何をか包むべき我らは只今父もなく母もなし。両親の爲に中山寺にて髮剃し名は眞光と申す者。師の御坊の仰には木像繪像は假の寫。誠の佛にあらざるを學問勤めて一心に。誠の佛を見付されば父母は助からずと。深く教へ給ふゆる天道に願をかけ。誠の佛を見せ給へと明暮祈りの験しにや。或人の申せしは昔の西行法師こそ。誠の菩薩を見んと思は。江口の君を見よとある。夢想をうけ給ひしかば江口の君といふ傾城。忽ち普賢菩薩と顯れ。白象に打乗り西の空に入り給ふ。汝も其如く神崎江口の格子を見よ。佛とも菩薩とも拜まれんとの教へに任せ。折々寺をしのび出で格子。子を拜めども。阿彌陀も觀音とも見ゆる人は一人もなし。ア、情なや父母のこれでは浮み給ふまじと。泣てすこ。立歸り教へし人に斯といへば。只は中々拜まれし傾城買ふていとしがれ。如來と見えんと教へしが有難や只今の。物語に疑ひ晴れ。懐の極樂。生如來を拜みつき二人の親をも佛にせん。嬉し。サア早ふ抱て寝て下されと。衣脱捨て帯解て悦び勇むぞあはれなる。園原も持てあつかひム。こはい事いふ坊さまじや。天魔の魅れか怖ろしとをつと立て逃入れば。聲を上げてこれ申し佛は慈悲と申さぬか。一目拜れませなふ。よし叶はずば此人にと。花紫に取つけば。あればん様の勿體ないとはも振切り逃入たり。淀河吾妻屋網代木も外して奥に入りければ。わつとばかりに聲を上げ。五百生の骨を粉にはたき。報恩の燒香に焚盡しても一度の。佛に逢ふ事成難と師匠の教へは是なるか。足摺し

てぞ泣叫ぶ。誠の佛と思込む愚かさ。哀れに殊勝なり。宮城野は涙を浮べ。皆々人の偽りぞや。西行法師は昔の智者江口の君は佛の化身。浮ふし辛き流れの身煩惱迷ひにせめられて。罪障深き我々が。地獄とは見ゆるとも佛と見えん様はなし。お師匠様へ聞へては御爲も悪からん。歸らせ給へどすかしても。たらしめて開分なく。イヤ抱れて寝ても極樂の。内まで入らふと申すまじ。つい帯解て門口から覗かせて下されど。人目も分かず泣口説く。亭主聲を荒らげこれ御坊。金も持たいで傾城狂ひが成ものか。重ねて金を持っておじやはや。歸りやと威しける。法師聞もあへすいかにも金は持て来た。まだ黄金でも白銀でも入次第盗んで遣ん。先是取れと一歩小判四五拾兩。ばらくと投出す亭主ぎよつと驚きて。こればさて我らが目には此小判。如來と拜まれ奉る大夫様達頼みます。間夫といふては大人氣なし客といふてはかすけなし。齋坊呼んだと思召し一夜別事のお首尾の程。宿への御合力皆々來いといさむれば。出入の判問下男やりてのまきは醉散し大々盡が取れたりと笑ふ顔を亭主が見て。是申し法師様奥に佛があるしるし。二王が迎ひに出られたと。嘆きよめき唯立て奥の。二階に。三重移り行く。人間不定の世の慣ひ。民部の省教房はいにしへ乗し三枚も。身は一枚の夏衣一重木綿の空色に。立つ雲介と息杖の生たる甲斐も涙川。舟引者に雇はれつ或は徒荷田の草の。露の命を繋ぎしが宮城野は此里にと。閉より鳥渡餘所ながら。面影ばかり見てゆかふかいや。我は難風にて死せられたと言上す。京の揚屋の不首尾もあり。如何はせんと迷ひの辻。よしやまよの一足より善悪千里の虎の尾を。踏む心地して顔隠し揚屋町をぞ通りける。實に此處のならひにて深き男の方よりも。幟兜を送るとは登り詰たといふ心か。ム、聞えたく義理を取たる紋處。色と情の名を取て此界ばかりが三蓋菱。幾夜も揚羽の蝶。變るまじとの念力の矢筈の。的に三星や。賤の糸巻繰返し通へ千よの櫻から花藤や立花桐牡丹。五つ輪

違ひ三巴丁子に匂ふ。薫を。誰が八の字に入れこ菱。桔梗かたばみ毬狹。風風の丸扇の九手を盡してぞ染なせり。エ、口惜や我古への我ならば。宮城野が幟をば長さ三丈幅二丈。中將姫に誂へて蓮の糸にて織すべきに。一尺五寸の手拭さへ買兼る此身代。巾着の風思へば無念千萬なり。斯る處へ廓の町代めはたしく。上の宿より配符が廻つた町衆御出なされませと。觸れ廻れば年寄行事出合せ何事やらんと立騒ぐ。これく差紙の面宿送りの流人あり。人夫二十人出すべしとの書付。方々雇ひまはせども。今日の事にて今一人不足いたし。僅尼が崎迄を一貫の一步の。足もとを見ますといへばよし一貫が二貫でも。公用は背かれじといふを聞付民部の省。是は見事な働きと申し。私則ち尼が崎の駕籠の者。戻りがけの事人が一貫取ならば八百で参りましょ。去ながら旅籠に外れ。腹中が物さびしうて働かれず。したゝめさせて下されふかといへば。ア、飯でも酒でも其處らは又町方とは違ふたり。それく早ふと持て来るつい出来合といふぶんが。大夫客の膳部にて二汁五菜の産平皿。尻頭付の大焼物味は昔にかはらめや。肴の顔も見忘れて鯛は近付久しけり。犬も歩けば防風の指身のけんによもない仕合と。悦び肴を取る處へ町の番太がア、是待たく。駕籠の教信といふ道心此邊に徘徊し。報謝の爲に價も取らず。旅人の荷物を持ち人の肩を休むる修業者。所の爲になるならば。たゞ雇れて参らんと申すあの者やめになされといへば。それは珍重八百のきはひ。それ膳上げよと取らんとするを先お待なされ。据つた膳を手もつけず餘り本意なく残念なり。其義ならば私も價取らずに振舞ひ計り。口の上で参らんと引留むるを釋放し。膳を上げて入れればはつといふて力を落し。物食ふ時んば物いはずと論語に書しも理りかな。よしなき口上のべしゆゑ。今更物を思ふよな。寶の山に入りながら咽を空しく干けると投首。してぞ吐きける。斯る處に流人の半輿揚屋町へ來りしと。いふより早く真中に昇するさせ。仰渡しある間町人

残らず遊女ども。罷出よと觸ければ。あつと答へて面々の格子の前にぞ並びける。何心なく宮城野も表に出て、つくばいしが。縁こそあらめ教房と膝を並べて肩と肩。摺合ふばかりに思はずも互にふつと見合せて。驚く體を包みかね側目遣ひに持つ涙。物は言れず心せく身を寄せかくる袖の下。手を取かはし憂さ辛さ逢ふ嬉しさの數々は。十つ十の指先に思ひをしめつ數へけり。預りの檢非違使大音上。此流人は播州實古の令吏といふ者なり。嫡子民部遊女に溺れ。大内造替の金子を掠め不行跡の餘り。身は船中にて死せしと偽り行方なし。是によつて父の令吏を人質として遠流せらる。民部若し人情あらば傳聞て罷出で。官金を掠めし科を償ひ。父が命にかはれよかしと衛府の別當の内意をうけ。扱こそ斯は下知するといひも敢ぬに教房。飛で出るを宮城野は引留めく押鎮め。さあらぬ體にて突と出。我らこそ民部様の御身を亂せし都九條の宮城野と申す遊女今の仰せに不審のひ。金をさへ辨へば親子助かり給ふ事か。又金子を辨へても。親子の中に一人は是非に命を取るゝか。其様子にて民部様行衛の知れまい物ならず。聞きましたいと云ければ父の令吏禊籠でしの。物見より顔差出し涙をばらりと流ひて。我子の心を盡したる宮城野とは和御前よな。殊によつて民部が行衛知るゝ事もあらんとは訴人をするか恨めしや。船は損じて死したりと教聞に達せし民部の省。死んだるは偽と名乗て出て。虚言者偽者と指さるれ公家武家の交りなるべきか。親孝行の爲なれば民部が耻はなきにもせよ。我子に繩のかゝるを見て。親の身でおめく。此禊籠でしが出られふか。傾城なれ共民部が妻我爲には嫁ぞかし。恩愛妹背の執着には親を背き主を捨て。身を損ふは凡夫のならひ我が子ばかりに限るでなし。民部はおことに身を果すむとせばおつこの訴人かや。情なの老の身や世の中の子を持人。親の命にかはらせて殺す爲とて養育し。育つる親はなきぞとよ。民部が是へ出たりとも。嬉しと思はれこそ却て長き勸告ぞ。三十に足らぬ子の

命。我七十の命を換え。塵芥とも惜からずなふ預りの武夫達。配所迄は遙々と生て愛目を見せんより。道にて害し給はれかし情ならば殺してたべと奥の戸叩き口説きたて人目も。耻ず泣給ふ。宮城野は目もくれてわつと計りに伏轉ぶ。民部の省は。勘當の詞に恐れ名乗もせず。親の苦しみ親の恩。心魂に涙流り身を悶えての。包み泣。上下の遊君往來の人。實に道理なり哀れやと袖を絞らぬ者はなし。木石ならぬ檢非違使等。泣々籠輿昇上させ次の「宿へと早めける遙のあとより。教信法師荷持の人夫に立交り。涙のひまに宮城野とはそれと聞くより立寄て。愚僧こそ民部殿の弟。花二郎教信入道教信といふ者よ。さる仔細にて發心し旅人の荷を持ち法かいの肩を休むる願を立て。父の流人と知らずして此姿をば覽せよ。名乗て父に思ひをかけ歎きをかけん悲さに。包む心を推量あれ過りゆゑの國法にて。親助からば子は殺され子が助からは親殺されん。一人は兄一人は親の身の心も同然に。一人は夫一人は男いづれも思ひ捨てたし。是より修行をかえ一字半錢の頭陀を貯め。金を辨へ親兄の命をこふて見るばかり。エ、換はらるゝ命なら他人さへ惜まぬものを。兄上に逢たまは父の詞を言聞せ。短氣の心なき様に異見してたへ宮城野殿。兄の片身と思はれて。名殘惜やと絶付き。聲も惜ます泣給ふ。心なき人夫共こりや藩坊主。痴話は今度してもらを時づけの宿送り。急げくんと押立て引連れ。行ぞ。三重力なき民部の省も堪りかね頼冠取て捨て。駈出るをこれ狂人親御様弟御の。今の詞を聞き乍ら名乗て誰が爲なるぞ。金を辨へ歎きを申し其上の生死ぞや。智慧の鏡も曇りしか。なふ狼狽下下るなと涙を流し留ければ。ヲ、命を繋ぐ薬はあれど命を賣ても金はなし。なまじい心を盡さんより父諸共にと駈出るを。はて氣の短いにこそ手懸有と。漸々宥め其身は亭に駈上り。ヤア最前の法師様。くと呼びければ眞光は斯とも知らず。何ぞと立出る。これ申し心入が殊勝さに包ます語らん聞給へ。我こそ江口の君の流れ普賢菩薩

の化身なるが、衆生濟度の方便にて假に遊女と生れたり。誠の形を顯し拜まれんと思へども、此儘にては成難し佛は金程光るといふ。金銀たんと有ならば我身を請出し佛體と。拜まれて見せ申さんと。いひも果ぬに眞光禮拜合掌し。お師匠様の經箱に小判が百も千もある。閻浮陀金といふ金で作つた觀音はぞんの内に籠てある。是も盗んで遣りましよが。どうも持て出られず夜に入て門前迄。取に來て下されやそんなら早ふ往にませう。念願違ひ下さるなと衣着ること不便なれ。其疑ひは惡い事佛に偽りあるものかと。取て被ける編笠の空腹じうないか飯いやかと。愛したらして表まで送りいでつゝ教房に。かくと囁き悦びて後姿を見送れど。親子と知らぬ因果づく空恐ろしくや思ひけん。跡振返つてなんと金さへ上れば。佛を拜むが定かや。アレまだいの。寺々の奉加散錢は何の爲。臨終に誠の佛を見たといふではないかといふのと。いはれてはくく打うなづき出けるが。又振返り。何と師匠の物を盗んでも利に成はしませぬか。ア、盗みは愚か。佛の爲には師匠親を殺しても。一念彌陀佛即滅無量罪お経は讀ますか知らずかといへば眞光横手を打ち。ア、それく左様じや盗みませう。晩方に風呂敷持て取に來て下されと。勇みて行を親子とも知らぬが佛是は又。知らぬがゆるに地獄の縁教へて罪をつくらせて。明日の命は閻浮の塵。閻浮陀金の佛の罰とは後に。三重知られけり。別れて後の。音信も中務秀光は所々の温泉に湯治して。金創平癒せし處に主人流人の風説。民部の省を尋んと思ひ立寄り若君の。山寺住居學問に疲れ給ふか覺束な。聞ま欲くと中山寺密かに斯と案内す。上人急ぎ立出給ひ少病少難の挨拶もなく。は邊に逢て叶はぬ所幸ひ哉。さて眞光法師は師弟の契約切りやす疾ふく連て歸れよと。つぎもなげにぞ仰せける中務前後を知らず。師の命とは乍ら孤兒といひ如何なる過失か。學問の利鈍は生付。惡あがさは子供の習。如何なれ盗み亂行はひはじ。別に底意ばしひかど色を變てぞやける。ア、は

不審はことほり經も人に勝れしゆゑ。木像繪像は假の寫し。誠の佛を見付よと教へを聞入て。信心堅固に勤めしがなふ。何時の頃より神崎の遊女町。宮城野といふ傾城に通ひ初め什物祠堂を盜取り。今朝夜の中から出けるが今において歸らず。心中でも致さうかと今日まで異見もせず。愚僧が虚言か神崎にて尋ねられよと仰せける。中務呆れ果て。まことに是は善惡の評議に及ばず。所詮は寺に逗留いたし。事に因て討て捨るか是非を極めやすべし。然らば一先此方へと。上人諸共物蔭に隠れて「こそは待給ふい佛を見んと眞光は口に念佛三枚肩。門前に昇下させ。編笠脱棄奥を見れば。師の坊は方丈に高軒。同宿一人もなかりけり折よしと嬉氣に。枕元に差足して。ふばこの引出し密と明け。讃對揚の次第書せんばう回向の秘密の書籍。上を下へ打明け探し施主書したる金銀を。残らず取て搔抱き袖より漏るを搔まつべ。取落せば搔寄て佛前に供たる。順禮の笈摺を。廣げて金銀を押包み懸て頸にぞ懸にける。抑當寺の本尊は聖徳太子の前生。舍衛國にて作り給ひし十一面。運慶湛慶の兩尊諸尊巍々たる靈地なり。閻浮陀金の金佛の作りこめしはいづれならん。さもあれ片端わつて見んと庫裏の大錠提げて。中尊の御肌に丁々と打ければ。あら不思議や御身より血は紅とほざばしり。眞光忽ち顛倒し。うんと計りに絶え入しは顯著なりける靈現なり。上人驚き起給へは中務の弟子達。是はくど抱き上げ藥を含め水ぞよぎ。呼助ければやうくと人心地こそつきにけれ。上人額に筋を立て弟子を可愛く思ふこと。子は持て知らねども子とても斯程はあるまじき。やれ小僧め。智者になれとは教へしが傾城買へとは教へぬぞ。唐の明解といふ僧は。地獄にて詩を作るほどの學匠なれども。出家を落たる科によつて八萬地獄へ落しと聞く。この笈摺もおのれに着せ及に死したる母が爲。順禮させんと拵へ置く。施物を盗んで包めとて拵へはせぬぞとて。打頭ひ投付て大聲上て泣給ふ。眞光顔振上げ中務を一目見て。なふ耻しや堪えてたもと

學問寮に走入り。内より障子をはたとさし泣より外は音もせず。民部の省宮城野は廓を密に忍出で。門外より窺へば眞光法師の破戒の詮議。南無三寶と御堂の軒耳を澄して聞居たり。中務障子を叩いて。二見事耻を御存じか。某に耻んより何故天道を耻給はぬ。其宮城野は都にて父民部殿を迷はせし女の御身に取ては親を損ふ惡魔とも又は母とも謂つべし。母と契るは犬鶏。生ながら畜生道。佛物を盜取り佛の箔を剝すとは御坊の事よ。年にも足らで遊女狂ひ最早出家は廢たり。佛身より血を出すは五逆罪の惡僧よ。其一心の不所存ゆる六親眷屬地獄に落し給ふよな。當年は御母上は第三年。佛には成給はで奈落に沈め給ふかや。宮城野ゆゑに父上の汚れたる名を雪ぎはせで。未代までの名を流し未來の劫を添へ給ふか。さりとは佛罰三寶の。當り果たる親子やと怒りつ歎きつ口説きける。宮城野夫婦は驚きてさてはは子か我子よと。駈出んとはしたれども。上人に身を耻て歎き密みておはします。や、有て師の坊。障子の隙を覗きたまへば眞光はなかりけり。あら不思議やと戸を明けいづの間にはは落失せけん。扇に残せし一筆を各驚き讀て見れば。人に欺され面目を失ふ。今夜の内に身を果し親師匠の名を雪がん。後世用ふてたび給へと讀みも終らず中務。寺中是はと騒動して未だ夜は更す遠くは行かじ。多田よ山田と手分して其處へ伊丹此方へ池田。稚き者に強意見ちやうらいこふじて尼が崎。先神崎の傾城町太鼓鉦よと聳く中に。夫婦は歎き悔みても誰を恨みん親心。親は子故に迷ひはせでこれは。親ゆる迷子よよ。くと呼べとも人は夏山の。木の葉隠れの天つ星影も。見えぬぞあはれなる

夏山と星影

迷子。に迷はかされて。迷ひ行。親子の中を。雲なへたてそ二番には親につき。佛とも師匠の。恩の山

寺に。名残も後夜もつき。果にけり。假初に三とせ住む目印の。森も林も木がくれて迷道暗き子心よ。追はゆる親は此處。此も彼もの道知らず。妻は遊女の外知らず。尋ねらるゝも尋ぬるもらづく。當どの五月開常夜の暗と。目も暮て。側に立つさへ見えざれば。息をばかりの時鳥啼く聲々に血を吐きて。野邊のつゝちを染むると聞。鳥の涙は借らす共。つゝちも松も我袖も。我涙にぞ染つべし。それを知邊と立寄れば。あだし烟の梅田の火屋。出家たる身は法界の回向をなせとの師の教へわすれじもの。と手を合せ。今宵最期の。身の回向。ともに手向る念佛の聲それぞ知らば縋り留め。抱きかゝえても行くべきに我子の聲も知らばこそ。餘所に驚く世の無常尋ぬる人を殘し置。先へくと一筋の。道を「急ぐぞ哀なる物思ふ身の。短夜を誰がならはしの長良川。渡し呼ぶなる風の笏を小耳には。我を追手の呼ぶかどて。又道替て。道もなき野原笹原菰原の。火葬の燃る光にも。見付られじと身を忍び。隠るゝ中にも南無阿彌陀。出家の役と重氣に。回向をなすぞいとほしき。夫婦は斯とも白露の小萩が下を思ふにも我宮城野が遺瀨なさ俄に胸の騒ぐこそ。今や廓に我を尋ねん恐るしや。追手掛りて憂目にあひ。年切増て見世端に。引下さるゝはまだせめては身の上にも首綱の。かゝる苦患の身になれど二人の。親は。産付ぬ。如何なる業の種蒔し。心中するの笑はれずと。泣き歩む夏草のかもの。さんまい行きなやみ男心もとほくく。堤にとほす狐火を。彼は我子の人魂よ。結びとめんと手を引て。走り近寄る先に消え。後にとほすを我寺の。人の來るよと逃て行く。此處にとほりて此處に消え親は追付く子は走る。一里の野邊を此處彼處行返る間に幾度か。袖と袖とを振合せ摺違ひても茫然と。それとも知らで別行く末は小長谷の。はかなやなあやなやそれよ。これよと抱きつけば古草摺婆。風しんくたる夏の虫露も。涙も争ひて。いと哀れや。添へぬらん別て今宵の身の上に。無常の調子聞けとてや難波の。寺

の鐘の聲高津の墓所に夕立の、雲のむら／＼風迅み、臨終急ぐ雨急ぐ死に後れじと迫れ共、子供の足に雨の脚大人の足に追抜て、烟しるべに千日の柴も命も一時の、惜まぬ身さへ雨宿り生て居る間のならひぞや、火屋の軒にも我々は立寄る陰もあるぞかし、いとほしや稚き身の濡れ萎れてやあるらんと思ひやるにも夕立に争ふ、袖の血の涙、降れば濡れじと刈麥や、袂傾け此處彼處の、木蔭をもとめて隠篋、隠篋にもあらざれば、なほ降かゝる涙の雨に、目もくれ、心もかき、曇る夜の星も光を失へり、婆は假なる雨宿り、冥途の使ひ、誰をか雨の晴間と残すべき、残さば残せ我は只此曉を殘さじと、思ふ中にも父母を婆、婆、と冥途に引分て、逢ふも嬉しく去も憂き絶ぬ、涙のしよ／＼川を、是ぞ三途と一足に飛田の、墓にぞ、三重、着給ふ此處を死ねべき、處なれサア死なんとは思へども、双物とては用意もせず淵河あるも見えわかず、首のしめやう猶知らずおりの如何して死なふぞと獨ごちして泣給ふ、それよ人の咄に聞置きし、しゆきんの土帯くる／＼と時や移ると石塔の、かさは碎けて苦蒸せる三重臺に攀上り、しるしの松の枝垂れし梢に帯を結び下げ、輪紐を喉に纏ひかけすはや末期と手を合せ、既に飛んとし給ふ處へ宮城野夫婦は此處彼處、尋ねあぐみて石塔の前にす／＼立情れ、淺ましや斯ばかり足に任せて廻れども、尋ねる子には逢もせずまたしても／＼、火屋三味に來ることよ始めの程ははかいさど、心に祝ひ直せしが思へば最早死したりと、是や佛の知らせかと二人は墓の臺石に縋り、伏てぞ歎かる、眞光は宮城野が聲と聞くより耻しさ、顔は見えぬぞ我子と呼ぶは別れて久しき父の聲、お師匠よりもなふ怖や出家おちじと叱られて、撲れ抓られ勘當かな恐るしさよと息を詰、身を堅めたるあしたゆく蜂やいら虫ひとり出、野邊の藪蚊の顔も手も群り喰ふたえがたさ、臨終病苦の斷末魔と齒を喰ひ、しはるぞ不便なる、涙の隙より宮城野は眞光を透し見て、なふ是に石の地藏のお立ぞや、此菩薩は稚き

子の二世を守りの御誓ひ、命あらば現世の祈禱、死せ給は、後の世を助け給へと諸共に息を限に伏轉び、涙を川と堰入て小田の、蛙も諸聲の鳴音は、野邊に餘けり、稚な心に無慘やな父の名残に夫婦の歎き、涙は胸に堤も切れて、目にも餘りてばら／＼、ぼろ／＼と二人が顔に落ちかゝれば、こは夕立の名残の雨か未だ大降の來ぬ先に、暇申していざさらばとて、願以此切徳平等施、一切衆生のはかなさは、目前我子を見殺して、知らずも別れ立歸る、後に回向の、句を繼て、發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛と石塔蹴放しひらりと飛べば、十三歳の短夜や息を引取る善の綱、此世の夢は早覺めてむなしき空に吹く嵐、嗚驚く鴉の聲あはれ／＼あはれ、あ／＼あはれ哀れの鴉啼き心に、掛る横雲のたち、休らひつ立戻り、立へだてたる雨雲、我身一つはかきくれてまたさみだ、れぞぞ 三疊

神々

「巡り見る、浮世の波にくらぶれば、阿波の鳴門は磯小舟、賀古の教信叔父甥の、連道心と七墓を、夜なく分くる露の間も、亡き人送らぬ夜半とては、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無といふ聲の内より霧はれて、五色の雲に、乗るぞ嬉しき南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、阿の字には、あした夕の手向種樞の、露か未來には、終に百味と、なるを頼母し南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無あみだぶ、彌陀頼む、人は雨夜の、月星なれや、雲晴ねども西、西へこそ行けなもふだなもふだど、誰か頼まざる誰か誓ひの、あみにもれなん、いたはしや甥の小僧舌も廻らぬ念佛の、鉦も鐘木も細き足、跡に下るを引立て、飛田の墓所に時ならぬ群鴉の異しさよすかして見れば昨日迄、無き石佛の地藏尊誰人の建立ぞと回向をなしてヤア、此お地藏は宙にぶらりと下つてじや、ハアさては

首縊か南無三寶。來世も後世もはなの先づ現世を助けいでとは。さすがを扱て臺石にかけ上り。ユリヤ小僧細切て下すぞ。下で見事抱えるかといへば。おれやそれでも怖いもの。いやおれや怖いと泣給ふエ、。なんぼうの亡者にも出やはふが。今から怖ふてなるものか。些と叔父坊主が死人さばきを見習へど。手巾を切て吊下せば新發意も耻しめられ。下で抱ゆる奇特さよ。飛下り膝に抱き上げ。何國の誰とも名は知らず息を計りに小坊主やあい。くニ坊様なふく。呼助くる其聲を餘所に吹きやる小夜嵐。風の羽を知へにて。宮城野夫婦は彼處よ此處よ尋ね寄り。粗忽乍ら人を呼び掛け給ふ體。誰方にてみぞ心掛りの事ありて。尋ねまするとありければ。我は七墓巡る教信といふ道心。誰かは知らず小坊主が首縊つて死んで居る。ヤア教信とは扱は賀古の教信か。我こそ民部よ宮城野と走り寄り抱き付能々見れば真光なりなふこれぞ昔の光明。丸只今地藏と見違へて見殺しに致せしか。ア、いとしい事をしましたと肌につけ身に觸れても。次第に身冷え骨堅まりその甲斐更に無かりけり。浮世を捨てたる教信も。恩愛悲歎の涙にくれ。さてもく我々親子一家には。如何なる宿業あればにや。一人や二人か三人まで。出家となつてもつきせぬ因果こはそも何の報ぞや。此小僧は北の方の死骸より出生したる忘れ形見。こりや小僧。此死骸こそおことが兄。彼は親よと教へ給へばうるく。と側に寄れば。宮城野も母と思ふて下されど。抱き寄せれば抱かれて。涙の中にも出家とて兄の死骸を伏拜み。南無阿彌なむあみ南無阿彌陀と。十念授る弟の愛らしさ。死だる兄の悲みに人々わつと伏轉び。泣沈みたる有様は人の哀れを聞なれし。火屋の煙の下燃も涙に。濕る計りなり。時に六しゆ震動して行も來るも本地の娑婆。四土不二隔ても七墓は八大地獄と鳴神の。山は鐵城水は清劍。修羅の鼓惡鬼の怒り大地も裂るが如くなり。氣も魂も消え果て天狗道に落けるかと。願れば抱きたる真光の死體はなし。あつと駭く中空の。雲中

に火の車矢を射る如く。三重。飛來り獄卒侃々たる聲を吐き。如何に汝等儘に聞け。真光法師梵行をみだり。罪業遁るゝ處なく閻魔王の勅に因て。火車上に召捕つたりさるによつて。目前に八大地獄を見せしむる。是を見よと鐵の華表の前にやりつけ。真光を下し置き車を飛せて。失せにけり。真光法師は。開々たる冥途の旅臘月夜の如くにて。颯々たる風。腥く身の毛も立て恐るし。茫然として立給ふ人々夢とも辨へず。總付んとし給へば牛頭馬頭五色の阿呆羅利。跳り出て吹かくる火焰濁く雲烟。隔となつて目を暗まし互ひの聲を聴くばかり。涙に咽ぶぞいたはしき。ありつる獄卒銚又ぶりを提げ。真光法師を追取巻き取て引上げ手玉に突き。兩手を引張り或は大地に引伏て。打つ敵いつ責さいなむ悲やゆるしてたべ。父よ母と乳母よ叔父道心のお慈悲に。念佛申て此苦患少しは助け下されど。歎き給へば宮城野は皆われゆるゑの罪科の。苦みわ我身に換え其子を助けたび給へと。立寄れば立隔て其甲斐更に奈落の責目も當られぬ次第なり。誠なる哉稱家名號下至十聲の其功德。端嚴美麗の御僧安祥と出現あり。止々汝等とこなへ給へば。獄卒頭を垂首て銚を伏せてぞうやまひける。たへなる御聲あざやかに我はこれ六道能化地藏菩薩摩訶薩なり。汝假にもまことの佛を見んと誓ひし。一度の信心あるゆゑに所化の契約なさん爲め。是迄迎ひに來りたり汝人の虚言にたばらかされ。街賣女色に身を觸れ偷盜邪淫の破戒の罪。外の罪に較ぶれば五百生に千人の。父母の首を切たるより。一度出家を落たる科重しとこそは説れたり。されば其罪障先立つ母の身に報ひ。地獄くを經廻つて今八萬四千の苦を受け。再び逢ふことなり難し。然るに本人の汝來る上は。母が地獄の苦に換んと。冥官の評定頻りなり。閻魔の廳に詣でなば。阿鼻獄中に落ん事。手を返すより早かるべし然れども叔父教信の道心。功德佛地に通じとめて娑婆に歸へさん爲め。是に遮り待受る。又此處に賽の河原とて童男童女の生所あり。此處ぞ我が受取にて

子供が待たん不便さに。我は是より歸るぞとよ。汝等も追付來れ繼母がいに殺されし。妹にも逢すべしさり乍ら。眞光法師は死したる身其外の者共は何れも命ある身なり。冥途の者の目に見えず。賽の河原に至るとも詞をかはす事なけれ。若も詞をかはしなば。娑婆の惡縁さづなとなつて。罪業甚だ重かるべし。構へて疑ふことなかれと宣ふ聲は光明の影に乘じて失せ給ふ。ありつる獄卒聲々に呵責の時刻と呼はつて。八方に飛び去れば山さけび谷こたへ山河草木鳴動して。常夜の闇となりけるは恐るしかりける。三重次第なり娑婆の。柵斷れ果て。歸らぬものは行水の賽の。河原ぞ哀れなる。渺々として果もなく。邊りも知らぬ眞砂地に。初立ちもせぬいさり火や初子這ふ子に四つ五つ。十を頭の嬰兒は。大名高家の公達も土民貧家の手育も此處に來りてへだてなく。せつりもしゆだもかはらざりけり。稚き癖の面嫌ひ人おめせしもおのづから。共に冥途の友達と馴る中にも無慘やな。痘疹にて死したるは。跳のけられて泣叫ぶ。中好の同士は手を引連れて。地藏様の教への佛事して遊ばんと。川邊に下て檻を摘み。岸に上りて石を積み花を。摘んでは。父の爲。石を積んでは母の爲。水を酌んでは佛様。の。さま幾歳十三一重。二重ともなき用帷の。ふくるび一つ縫着せぬ母に何處に隠れん坊。父よと呼ぶも木隠れて飯食はふなふ乳呑ふ。兄よ妹よ叫べども此處に。應ふる弟もなく。伴ひ賺す姉もなし。最早娑婆へ歸りたの惡さもせまい足掻まい。娑婆へ歸して下されなふ家へ歸つて母様に。べ。して貰ふて踊りたい。此方の家に置いて來たかいらぎ欲しい。豈欲しい。何とてか父母は迎ひには來給はぬと。西に呼はり東に走り。立たる権積んだる石。打崩し引崩し。不便や親の千代までと撫擦りたる裸身を。石の上に打投げ。歎き。焦る。その聲は廣き。河原に滿ちて。蚊の鳴く。聲に異らず。眞光泣や彷彿來て妹の千壽の姫。是か彼かど見給へども互に隔生即忘の。それと知らぬを痛はしき童男童女これを見て。あれ。小さい

長老様笑や。長老の首は。捻上た首で。殿様お馬。土の子は鎧持。能う鎧持たど。聲に子供遊びの哀れさよ。眞光涙の際よりもこれ。なふ子供衆。我も死んで來るもの。若此内に播磨の國賀古の民部が娘。千壽の姫といふ人あらば教へてたべと。呼はる聲に千壽の姫。朱に染りてよろ。なふ兄上かどよるほひ寄れば是が妹かいとほしや。淺ましやと抱きあひてぞ泣き給ふ。姫は泣く。とてもなら何故母さまを連立ては下されぬ。祖母様に噛れし疵が痛んで血が滴りて。餘の子供が寄つけず符薬つけて癒して欲しや。べ。も是はばつかりで夜は寒ふて寝ならず。何とてか母様はわらはを憎んで此處に。一人捨置き給ふぞや。詫ことして館へ歸してたべなふ。兄上と足摺してぞ泣給ふ。我とても離れ。の。死出の道。親子兄弟一所とは。佛にならでは叶はぬと絶り歎くを哀れなる。民部夫婦は縁え兼不惑の者や。いとほしやと。立寄んとせし處に。俄に川水ごう。と逆巻く烟を押分て。面は老女のむばらの白髪身は六足の黒蛇の形。憎し妬まし繼子の末通すまじいと舌を振り。鱗を立て馳かゝる。情なの姥は前の此處まで慕ひ給ふかと。兄弟手を引き逃給ふ繼母は怒つて邊なる。童男童女を蹴散かし。五百由旬の河原表。追廻し追戻し追蒐行くぞ。三重怖ろしき既に危く。見えし處に地藏菩薩は紫雲に乗じ。利劔即是彌陀號と左のほ手を伸べ給へば。寶珠の光明利劔となつて繼母の上に振かれば。容も縮み角碎け。恨みは盡しといふ聲ばかりほのほと。燃て失せにけり。菩薩美妙の聲にて如何教信。おことが堅固の道心諸佛の感應淺からず。今より汝が十念血脈受たる亡者は。往生疑ひあるべからず。是によつて眞光法師が。命を延べ娑婆に歸し。念佛の大檀那と爲べしと我れ閻魔王に請合たり。娑婆に歸つて精舎を建て其身の罪を懺悔して。親兄弟をも助くべしと錫杖さしのへ給ひける。眞光感涙せさあへす願くば。我を留めて妹を歸してたべと泣きたまへば。ありつる童一同に我々も歸してたべ。戻してたべと泣

呼ぶことばりなれども汝等は。死して程経る者どもにて灰に焼れ土となり。歸すべき身體なし今真光が結縁によつて。汝等は娑婆よりも。極樂浄土の目出たき國へ追付生れ至るべし。それ迄の父母は我なるぞ。いざとくくと宣へば真光は妹に。名殘惜くも佛勅の重き力やかるくと。錫杖に取付て行くとはかりは一心の。跡に稚き聲々の我も行ん歸りたし。さらばくと泣叫ぶ涙も露も吹拂ひくと。花も千草もちりくの嵐の野邊と。三軍吹返せ。かやせくとの鉦太鼓のばち利生あり佛法不思議。中務寺僧達等ね廻りししるしの松影。四人の人々安閑と膝に抱きし真光の。魂は色身に歸ると覺はてよみがへり夢の覺めたる如くなり。中務駈寄て。皆く是はと名乗あひ嬉し泣にぞ泣き給ふ。真光も正氣づき互に冥途の物語。師の御坊の氣遣ひがり先づ登山と出し處に。南の方より土民ども一様に扮装て。御用木といふ轆を押建て。播州賀古の郡主より。大内献上の槻柱の御通り。先除けくと先綱元綱。はいやくくと引來る。中務堪り得ず。先に立たる庄屋が小腕。無手と取りとうと引する。賀古の郡主とは民部殿親子ならでは外になし。但しおのれらが私か。真直にやせと太刀抜掛てきめければ。フ、おゆかしのは家老様。代々の地頭の流人を欺き。惣百姓が金銀を集め。令吏様の流人をや宥め目出度を歸國遊ばし。其は禮に内裏普請の材木。献上致ひと悦び勇んでやける。かゝりし處へるなみの彌七郎熊源太兄弟を捕捕り。は迎ひに参り候とほ前に引すゆる。人々喜悅の眉を開きお手柄くと。主も手柄下人も手柄百姓は國の寶。朝廷に訴へば願ひも三つの車の綱。神變奇瑞の善の綱神の綱佛の綱。先綱元綱追かけ中綱見事能ふ揃た。そるた主従揃ふた親子。揃ふた夫婦の信心も。智恵學問も身代も上る。都ぞ道廣き。

第五

摩訶陀國に邪を防ぎて祇園を搦へ。舍衛國に鬼を驅て竹林を建てしこそ。佛法止住の因縁なれば若君は閻魔王の請により。黄泉に到り給ひしこと。寂閑に達し叙威の餘り。父祖本領に拜せられ。念佛の大旦那たるべしと地藏菩薩の契約。時を移さず鹿兒の庄に伽藍を建て。教信上人回向の導師幼少の御君に。法明上人の號を授け北の方姫君の。振苦與樂兼ては。又沙界の合議平等利益。靈佛靈像安置して。百福莊嚴百味の供物大念佛を開闢有。千佛供養の法樂。法談讀誦管絃の聲猿樂田樂妓樂を奏し。佛の恩を讃嘆し苦界の衆生をすゝしむれば。天熱變じて清涼地徳勝童子の土の餅の。果報めでたき百萬石の國中が打明て。日々夜々の參詣は市をなしける。三軍紅花の春の晨。紅錦繡の山粧ひなすと見えしも夕の風に誘はれ紅葉の秋の夕べ。黄かうけつの林。色を含むといへ共朝の霜に衰ふ。松風蘿月に。詞を交す賓客も。去つて來る事なし。翠帳紅圍に。枕を並し妹背も。何時の間にかは隔らん。籠の飼鳥。雲を懸ひ。空行く鷹は友慕ふ人間とてもかはらめや。戀より外は友もなき廓住居の八重むぐら。からまかされし。憂世話に詞を飾る文の數。一切經にはあらねども凡そ。七千餘通りなり。今ぞ佛に供養して救世の船の帆にかゝり。大悲の空の天蓋と此差傘をさしも草。觀世紙捻の觀世音つくる菩薩の誓ひ。罪を助けてたび給へ。懺悔物語やべし。そもくみづあげの下前髪のならやかに。好色の雲をかざし。初床の夜のやもじにもつひに客衆の花ちりぬ。過ぎしは見の。夕顔の露の黄昏。身に染々と。我魂に封じ文。積り來て。今一心の蜘蛛手に懼る。八つはしやさりとばかりかきつばた。うら紫の恨み文。くるくし。糸んとひん結び身よりとばかり覆ませて。今日の一座の知らせ文。明日を頼の届け文紋目をおふて。め文千束。百束。文くる。ましの端書空起證。昨日の誓紙今朝の夢寢覺。浮寢に風騒々真為が。原の紙屑のかごとがましや。神の名も。佛の名も口馴て更に怖いと思はれず。罪業。如何に恐ろしや實

最明寺殿百人上臈

周書にいはく。國を治るに三常あり。一つには君賢を擧るを以て常とし。二つには官賢に任するを以て常とし。士賢を敬ふを以て常とし。あはせて三つの鱗形北條五代の鎌倉や。時のとさたる時頼の。ナロン執權の代ぞ。わたくしなき。徳をかくして權貴に誇らす。祝髮して最明寺殿道崇と號し。名古屋が谷の法華堂に。故右大將頼朝卿の尊影を。木像にささみ奉り大江の僧正廣辨を。別當に請じす。莊嚴靈殿のますが如く。神易となづけ六十四本の法鏡をこめ。およそ國家の政道にあやまりありやなしやとて。我身を法鏡にて。みるみてたゞし給へる賞罰に。天地自然にいつはりのなき世なりけり村時雨。冬至の日を吉例にて翌年の政所はじめ。嫡子天女丸時宗十六歳。舎弟式部の冠者時定廿三歳。その外れんじよ。昵近のれき。法華堂に群參あり。錦の戸帳ひらくれば各はつと頭をたれ生るに。仕ふるごとくなり。大江の僧正太祝詞奉り。法鏡の法宮押いたいて。千早振る正直正路の法鏡の文。よみ上げてこそ講じけれ。それ千里の地をうるは一賢人を得るにはし加ず。千金をつらぬるは一賢人を求むるにはし加ずと云々。この文の心は。たとへば大國をしたがへ萬寶をもとめんと思は。まづ臣下の賢者をもとむべしとのぞ知せ。目出たき法鏡ひと考へらるれば最明寺殿聞たまひ。われも豫て存するところ臣等がこゝろ君の冥慮に相かなへり。然らば建曆以來の勘氣謀反の輩の。上り屋敷の明地おほし。當代忠勤の方々へ分ちあたへんそれくと。中原の大外記執筆にて仰せに「したがひしける。まづ切通しの梶原屋敷は海を見はらし山に沿ひ。境内分に過ぎたれども宇都宮新庄司。友平に恩賜あるこれはこれ。父友綱が

梶原を射とめたる舊功。且は其身も學問好み記録を集め文武のたしなみ。行跡道をまもる由外をはげまし徳をすゝむるは褒美として。向後若君天女丸殿は師範にころさされけられ。葛西が谷の佐々木屋敷。も此佐々木兄弟は高名諸人に獨歩すといへども。讒者のために没收せられし分地なれば。先祖の忠節に感にたえず。佐々木の十藏廣綱にたびけるは。故郷にかざる唐錦絹張山の文覺屋敷。遠藤四郎にたまはる處。あまなはの盛長屋敷は結城の友重。妹背川の蒲殿屋敷は稻毛彌五郎。雪の下の長明屋敷當代和歌に名を得たる。河内守光行が光源氏の講釋場。今ぞ風雅の道までも色をあげたる紅が谷。佐野の源左衛門常世が屋敷は花好き者のあとをどとて。若君の花鳥は休息所にたびてけり。筋違橋の秩父屋敷赤橋左衛門所望の所。ひさが谷の土佐坊屋敷は金田の頼次。松葉が谷の佐竹屋敷は城之介泰盛。藤が谷の大神山。屋敷かねて足利望みに應ず。天神山のえがら屋敷は仁科禰司。小林郷の朝比奈屋敷は伊井島の景正屋敷。三浦光村泰村に賜はつたり。袖の浦の志津がやしき月影の阿佛屋敷。稻村崎の大介屋敷は平の宣時秀時。安藤左衛門光成其外祖流。二男まで分に應じ功により。住宅の地を安堵あるげに。廉直の法政やおのゝ。従ひなびきける。最明寺殿よるこびたまひいかに天女丸。來春よりは汝をも政道の連署に加ふべし。影には禮仕れ畏つて引繕ひ。資前に坐しむかへば裸と身の毛も戰慄て。忍辱柔和の佛眼もにらませ給ふは影の顔。二目とも拜まれず頭の上に大盤石の。落かゝつたる如くにて眼もくらみ俯伏にがつばと伏し給ふ。人々周章抱きのけ看病すれば氣もさはやぎ。顔色もとの如くにて不思議。とばかりなり。最明寺殿おどるき給ひ。さては神君の内に性にかなはぬとおぼえたり。は鏡に何ひ奉れと僧正やがて神咒をとなへ。は篋を振上げふりたて。は鏡の文を拜受あれば。豆を煮て豆の豆殻を燃く。畑たえさること日月の千回とよみも終らず。あらふしぎや此文は。兄弟の中不和にしてうらみあるこのは示

し。是に付て愚僧つねづ考へおきしに疑ひなく。天女丸殿こそは九郎判官義經の再誕ひ。そのいはれは判官殿は丁丑の生れ。本封帥の卦にあつて軍術に妙を得。中秋なかばの誕生敵を制するけい官。向齒反て猿眼鬚の髪縮みしとや。若君の本封支干は誕生の年月刻限。面體骨柄寸分相違なき上に。只今影の怒彼これ以て考ふれば。若君の前生は義經にきはまつたり。なほ其驗未やは覺じあはすべしと。三世命鑑理をてらし鏡にかけて説たまへば。思ひ合せて人々はあつと手をうち給ひけり。僧正重ねて。承れば奥州の田夫者。鎌倉殿の勘氣よ謀反人よなんごど。義經の墓を馬の飼場とふみ荒し。剩さへ頼朝公より錦戸に賜はりし。判官誅伐の教書國中にくちすさみ。は屍をはづかしむ早くは使者をつかはされ。彼のは判を焼すては墓を清め尊みなば。は勘當のしるしもうせ判官殿の魂魄に。天然自在の威光今若君の身にあらはれ。智謀計畧軍術輕業早業。武勇の達者となり給はん。其時こそ義經の生れがはりといちじるしく。愚僧が繰たる明鑑の易疑も晴れやさんと。見通す如くのべらるれば實に。左様のためし多し。然らば二階堂入道は奥に下向し。義經の墓をまつり同じく誅伐の教書も召返して焼すつべしと仰をうけてぞ退出す。かくて最明寺殿は影の前にすゝみいで。さてかたんに中わたす仔細あり。近ふ寄て聞きひへ。そもわが先祖北條四郎時政より。義時泰時打續き六十餘州の執權。今このは影の照覽にかけ政道私なしといへども。遠國波濤の末々民の盛衰。國守の邪正は見るにたたく聞くこと遠し。唐土の大祖皇帝は。韓王堂に一人御幸の例もあり。頭陀修行の身ともなり諸國の安危を見まほしく思へども。かくと世上に披露せば。諸人偽り阿りてまことの善惡知りがたし。されば此方丈の牀をしつらふこと餘の儀にあらず。上宮太子の身は夢殿にありながら。魂はしんだんの天台山に逍遙ある。我も年月學びたる座禪三昧の力によつて。この方丈に閉籠り觀念をこらし。身は鎌倉の法華

堂。一心は秩津洲の浦を里々巡見すべし。其間は弟の式部冠者天女丸と心を合せ。貞永の式目をまもつて政道おこせるべからず。僧正の外このとる案内禁制。座禪をはりて僧正の便次第にむかひに來れ。おつゝけ目出度對面せんと禪場の戸を引立て。入るさの月の影暗く寂寥。として音もなし。若君をはじめ諸大名國家の爲とある上は。とかうや上がたしさりながら。みやづかへやすものもなし萬事貴僧頼み存じひと。始終の約束こまなくと皆々「本所に歸らるゝ。かねて僧正たゞ一人に示しおさ給ふゆる。旅の物の具取まかなひ何れも歸宅ひて。はや夕霧のくらまされは旅立あれかしと。おとづれ給へばあら嬉しや數年の望み達したり。來年彌生末つ方たち歸るまでは我此處に。あると沙汰したまへやと内より屏おしひらく。花の袂を旅衣笠より外はやどりなく。苦を敷寝の平包み金軸の普門品。紫檀のさすが矢立の筆百八の菩提樹ならで。は身に添ふるものはなし憲清法師が世をのがれ。修行の肩にかけたるはやさしき綿の歌ぶくる。是は浮世の人心ゆがみを撓て竹の杖。月もるもに我もまた世上のやみをてらさんど。慈悲の眼のころも手や。民の草葉にやつれ給ふほあり。さまざま。三書ありがたき大學の道。明德をあきらかに生民をうけし天女丸。は同學には佐々木が嫡子花市。土肥の乙鶴金子の十九皆物讀のお伽にて。朝は武藝定つて。晝の時計を宇都の宮の邸に通ひ給ひける。今日のは供は上野の國住人。佐野の源藤太經景。若君のは出なりと案内す。友平立出で學問所へ伴ひ參らすれば若君を始めいづれも行儀繕ひてめんゝ。書物ひかへらる。友平若君を熟々と打まもり。さてゝは器用千萬。誠の聰明敏智とは若君のは事。それによつては伽の子供衆まで。我劣らじと覺え強く。小學入より日數もなきに四書古文三體詩。錦繡段此上に遊ばされんは五經文選。其はか聖賢の經書詩文の書。限りなくいへども。それまでに及ばず。弓馬の家には孫子吳子三略六韜司馬法などやて。合戦勝負の理非を述たる七書をよくゝは得

心あり。兼ては史記を覽あり古人の心を味はふを。弓矢取身の學問とはやなれ。大江の僧正廣辨が。三世明鑑を考へ九郎判官義經の。生變りとすされしにゆめゝ疑ひひはず。未頼母しき器量いよく文武のほたしなみこそ肝要なれ。それについて先物讀みの始めには。實語經童子經和漢朗詠音家往來。扱は判官殿の腰越狀は家の式目。是等は諸人存じの書。爰に未だ流布せざる秘傳の一卷。是を傳授致さんと筆筒の底よりどりいだし。是は君の前生判官殿。高館にては生害の時一期の遺恨を書著し。口に銜んで失せ給ひし銜狀とすすもの。文法やはらかにいへども。無點の物にいへば。一通教へ奉らんと押開けば天女丸。さては我生れぬ先の筆蹟かと。見ぬ世のむかしなつかしく涙を聲にうかべながら。同音にこそよまれけれ。

うゝ聲く三狀

そもく義經末期に謹んでやす。荷くも清和の臺を出で。多田の滿仲の家をつぎしよりこのかた。繼父清盛に隔てられ邊土遠國を住家とし。土民百姓等にぶくしせらる。然といへども常家の運を開き勅選の。其一つに選ばれ或時は。野に臥し山に臥し又。或時はまんゝたる海上に。風波の難を凌ぎ敵徒の首を斬て。鯨鯢の腮にさらし三年三月に攻なびけ。大臣殿父子を擒り京鎌倉を渡し。源氏會稽の耻辱をすいぐと雖も。梶原が讒言に依て空しく莫大の軍功をもたされ親しき兄弟を。僅の侍一人に忍召かへらる。たゞこれ不運と存す將また。前世の業因を感ずるに似たり。仰ねがはくは梶原が首を刎ね。義經に手向られば今生。後生の恨あるべからず萬端筆紙につくしがたし。恐惶敬てまをす文治五年。閏四月二十八日。謹上鎌倉の右大將殿源の義經と。讀も終らず若君涙にむせび給へば。同學は供の少年まで皆々

本國伊豆の三崎へおし渡り給ひひ。勢ひ全く逆心のほくはだてと見えひ。大殿坐禪におこもりのうちど
 中。延引にてはは大事たるべし。きつと征伐しかるべしとの注進なりとぞやける。天女丸横手を拍て
 こはいかに。その旗といつば先祖時政に。江の島の辨才天ぢきに與へたまはつたる。三枚の鱗を旗の紋
 と勘請し。守とも寶とも是で立てたる北條家。伯父は一家といひながら庶子へ渡さんやうはなし。しや
 何事かわらん伊豆の三崎はさておきぬ。鬼界高麗けいたん國雲のはて海のはて。陸ならば駒の蹄の立つ
 かぎり。海ならば櫓の立んずところまで。攻よせく取返さでおくべきか。天女丸時宗が鐘はじめの
 初陣に。伯父の首引さげすんば鎌倉へはかへるまじ。山路を廻つて人馬の足を疲らすな。由井の濱より
 兵船いだし。たゞ一時にもみつふせ。馬に鞍おけ物の具せよといさみ進みしは有様。げに義經の再臨と
 私を打ざるばかりなり。梶原が死靈におかされし。源藤太進み出で。このたびの先陣はこの經景がたまは
 つて。眞先懸ふするにてひ。仰せ付られひへこそ望みけれ。若君さくもあへすイヤサ。先陣も後陣も
 この時宗がなぐばこそ。先陣はそれがしよやく殿は將軍。是非先陣は經景に賜はれかしとことば
 を返せば。いやとよ大將軍とは父最明寺殿ならで外になし。我も汝們同然よ高名は任勝ぞよ。親にも子
 にも遠慮なしのそげや急げ速ければ。侍事あつてしづかなり遅くて走る道はものうしと。名將の讀しぞ
 かしと口ずさみ出で給へば。源藤太は袖をひかへ。しからは今度の舟には阿蘭陀櫓を立やすべし。ム
 ヲして阿蘭陀櫓とは何ぞ。さんひ馬は乗人の心にまかせ退くもかくるも自由なれども。すはやひかん
 と思ふ時船おしまはずにまゝならず。不覺の負を取るものひ。船に櫓をたてちがへ傍花を入れ。何方
 へも廻しやすう様にといはせも敢ず。エ、門出悪しいまゝし。一足もひがじと思ふさへ退は軍のなら
 ひなり。豫て左様の逃用意。臆病神の末社殿とわらひ給へば同學の。十四十五のともがらまで手をた

いてぞ笑ひける。藤太大きに赤面し。惣じて武士は進退をわきまへ。命を全ふして敵をほろぼすを以て
 良き弓取とは名付たり。和殿の様に口廣い癖に。尾の細いを鮫鱈武者とて何の役にたゝねもの。近頃笑
 止くといへば若君腹にすゑ兼ね。汝は只た今まで梶原をそしりながら。梶原同然の惡口我に向つて推
 參千萬。サア今一言いふて見よと太刀に手をかけ給ひける。ヤア最明寺殿より外大將軍はなきものを。
 此身も我も同然。鮫鱈も河豚魚も。いふて見せんと。しり合ふヲ、鮫鱈武者のきつさきうけて見
 よと扱はなし給へば。土肥佐々木なんごいふ一騎當千の嫡子をも。一度に小太刀をはらりと抜き真中に
 おつとりこめ。われ討取らんとひしめく處を友平絶つて。ア、勿體なし。大事の前のほつししみ最
 明寺殿思召も穩便ならずと。此佩刀を收めさせ罷立て經景。鎮まりひへ少人達と館に供ありければ。
 光成の使者經景が小腕とつて引出す。逆櫓の遺恨とまつて今魂に入かはり。身はから船の梶原が心と
 なるこそ。三重淺ましき寶治二年。十一月癸まじりの玉霞。雪の下の廣小路一ばいにふる黒羽織。奴
 輩に水柱のておくばに騒る唐辛。赤熊の馬標は馬北風になかせ。討て出たる大名こそ。最明寺殿の
 此舍弟。式部の冠者時定公といきはは狂なる供前を。殿つらしき類かぶり若黨二三輩ひき具し。押わつ
 て通らんとす徒士のものも引捕へ。こりやめくら奴冠者殿を見知らぬかと。類冠ひつたれば佐野の
 源藤太經景なり。馬上より聲をかけヤア經景か。時定直にたづぬべし。つゝと是へと呼付けはつたと睨
 み。此分は身代不相應に。輕々しく忍ぶ體はいぶかし。兄最明寺座禪にこもりおはする内は。この冠者
 が執權なるに供前わるは緩急もの。や分に依てきつと過怠にいひつけんと。返答あしくば鐘のはなにて
 蹴殺しのけんす面色なり。經景土にひさまづき答め至極仕る。さうながらいさゝか慮外にひはす。ち
 きに注進や上る儀ひゆる。人目を忍び右の仕合眞平は免蒙るべし。さて注進のおもひきは。先づそれ

がしが兄佐野の兵衛政經。先年人知れず開討に討れ、其子源左衛門經世は阿呆拂ひに仰付られ、兄政經が由蹟佐野の庄此經景に賜つて、奉公の忠を勵みひ。然るに紅が谷經世が屋敷それがし望みやせども、此用の場所とてりんしやくあり。この度故もなき者にさへ、いやが上に屋敷地を賜はり、多年懸望のわれらには換地のほ沙汰にも及ばず、經世が屋敷を若君のお花島になし拙者は鼻を明くばかり。國をたもつものは、一步の地も功ある武士に與へ弓馬の用に立てこそ、何ぞや若君のまだ乳のまふ飯くはふを、義經の再誕とはのかひの僧正にたぶらかされ鎌倉の名家督とて大分の地を花島に費し、若しもの時に草木の花が鎌一本の役には立ず、當家に於て天下の執權には、誰あらふ冠者公と諸人こそつてやすところ、殿のつがせ給はんに誰がくつともやすべき。さればこそ天女丸、殿をけふたく思はれ、最明寺殿座禪の内に攻め亡ばさん催しにて、則ち物語の師匠宇都宮友平、安藤左門光成以下をかたらひ合戦の用意事急にひ、かた／＼油断あるべからずとまつかひさまにぞ説しける。冠者は彼に物が付て言するとは夢にも知らず、馬より飛んで下り、フ、／＼神妙の注進大慶／＼、傍からさへはがゆきに我に油断ある物か、ぬからぬ證據を見せやさんと首に懸たる錦の袋を取出し、これぞ辨才天先祖にさづけ賜りし。三隣の家旗先この主になるからは北條家の大将なり、此分はいそぎこの旗を伊豆の御崎へ守り奉り、宇賀の社にこめおき湊の船場に關をする、渡海の船をといひせしおつ、け跡より加番として、佐々木の十藏廣綱をつかはさん、我鎌倉をもちかため安藤宇都宮に閉門せさせ、天女丸を押しめおかん兄貴の坊主がどがめなば、静謐の世をさわがする謀反人と訴ふべし、我願ひかなひなば屋敷なをはかるい事、一ヶ國は極つて其外の兼國のぞみ次第、辨才天も照覽あれ虚言なしとぞかたりける。經景おもふ圖に説言しこれ殿、とても事の事にその兄貴のほん様ぐるめにしてやらふとは思さぬか、ヤンそれを高ふはいはぬ

事心にはかり持てゐよ、向後此邊は一方の大將とたのむからは、威勢をつくる褒美として一家となつて北條の、家の定紋譲るぞと儲をつけたる鱗形、北條殿や扈丁殿にかゝらん末こそ、三藏危うけれざる程に、式部の冠者時定は天女丸時宗を、無體に押へ謀反人と號し松が岡の彌勒堂に、捕て押こめ重代の赤旗を伊豆の御崎に隠し置、山手には二重三重の柵をふり、海手に數箇所の物見の番、りやうせんが崎の船場には佐野の源藤太經景、佐々木の十藏廣綱役所を構へ、干瀉遠く逆茂木ひき渡海の船さへ停止あれは、漁村の賤も松魚つり鯛釣り兼て網の手を、餘所にみるめをかつきする海士もさか手を打やすみ、波の遊魚も飛ぶ鳥もかよふ、方なき要害なり、折しも夜更け、浪しづかに番所の篝火しめりゆけば、天女丸はやう／＼に圍をまぬがれ忍びいで、宇都宮たい一人かたらひ湊に紛れ着きたまひ、サア時分はよきぞ友平、兩番所も靜つて海上はひき潮なり、命限りに渡り越し向ふへさへ着たらば、番の奴原きりちらし旗をうばひ返すべし、よし仕損じて死するとも取かへさでは生甲斐なし、死ぬるにきはめていざ來いと、飛入らんとし給ふを宇都宮いだきとめ、如何にひきしはなればとて思召してもごらんせよ、三里にあまりし海のおも、徒歩わたりの人間業にかなふべき様ひはず、潮におぼれしは死骸を雜人輩に引きがれ、耻辱といひ讓者に利潤つくといひ、かた／＼粗忽の振舞は思案のいとろと、制すればはがみを爲し、エ、口惜しこれしきの事を治めかね、父最明寺殿へ言上し座禪のさまたげは大願を破らんは後代迄の譏の種親にはなれし我ならば、冥途へ問ひにやらるゝかとおざけりは歴然たり、エ、翼もがな鱗もがなと平砂に兩足踏込んで、こぶしを握りはら／＼と無念、涙はせきあへず、友まとはせる、小夜千鳥、おどろく方の人足や年の比はひ十八九、初夜の月さへ早西東さまよふ、振にて人々を、ちらりと見付足早にげんとす、宇都宮走りよりむづと捕へこりや女め、必定この番所へ呼れし傾城じやな、我々

こゝにある體を番の者に知らず振りて見えた。是からすぐにおのれが宿へ歸ればよし。番所へなぞ入らば海へ切て突はめん。サアどうじやとおどしける。ア、つがもない。何のそんな妾們である。この浦のかづきの海士。このころ御法度きびしう裙袴一本みる一株。とる事ならねば朝夕の迷惑さ。夜は番衆の隙間もとうつと見にきたばつかり。ほんに男に手をとられた一期の始にわだどうよくな。あとがひり／＼ひり／＼する。彼の若衆様やつはり締直して貰ひたいと。浦の獲さへ當代はたいは通さぬならはしなり。友平これは屈強きやつを賺して。海の淺瀬を問はんと思ひ。ヲ、ゆるせ／＼知らなんだ。其方に問ひたい事がある。返禮には錢遣ふひまは取るまい。サア彼の濱へちよつと來いと手をとればエ。錢どつて濱へゆく様なものじやござんせんとてひんとする。若君見かねてこれ／＼獲人。我々は念願あつて對岸の御崎へ忍ぶもの。この本望達すれば獲のかつぎも獵船も前の通りに自由なり。この灘を越す様あらばどうぞ指南はなるまいか。わりない事よとのたまへば推量したりけん。何がさてお尋ねといひ世上のためつゝまん様はなけれども。昔より此入海徒歩たりは沙汰にもさかず。さりながら如何なる千尋の大海にも。潮頭潮別れのほり潮落潮。かた潮も潮女夫潮なげ潮わき潮なんぞ。潮あひを見てかづきの獲の龍宮城へも入るなれば。かなはぬ事ともやがたしあれ／＼月かげの二つにわれて一筋に尾花のなびく如くなり。浪の別れの末こそは獲のかよひの潮路なれど。指さし／＼てぞ教へける。若君も友平も今は案内ござんなれど。裾か／＼けてざんぶ／＼と入り給ふ。なふ／＼たとへ潮路覺えても獲ならぬ身であふない事。怪我あそはすな先跡へといへども耳にさゝいれず。三段ばかりは足も立つ。次第／＼に波はたかし底深し。さすがの友平力なく。まづ／＼あとへと手を取りもとの「磯邊に打上り。お腰の物に水入らぬか。やれまづお足を拭ふて進せてくれ。頼む／＼とまくら手に袴をしはるばか

りなり。それ／＼人のいふ事聞わけなふ情のこわいはお身の損。若衆様のお足の拭ふにも手拭はなしわたりなり。鹽焼衣お慮外と上着下着揉くさにして。足の甲から足頸まで。／＼やはらかなお膚やな。此處はお膝／＼は太股内股の。此も／＼なら私や小町。お前は四位の少將で車の榻にと抱付く。若君とびのき慮外者めと。柄に手をかけ給ひしを友平しばしと留めまゐらせ。これ女あなたは鎌倉殿の若君。今度の騒ぎかくれなければ知つらん。汝が力に海を超えは旗を奪ひ参らせなば。財寶の願は云ふに及ばず。たとへ一夜のおなさけでも相違あらじとやさる。獲婦しげに打笑みて。さこそは見付参らせたり誠にいやしき獲の子の。お情とははかりあり鱗形のは紋付の。は肌着一重くだされば世の思ひ出に肌につけ。千里萬里の荒海なりとも浪をくゞり水を分くるも獲のわざ。奪ひ返して奉らんとせば若君宇都宮。それやすい事はなりともとひやう紋の唐衣に。から縫したる柳裏ひらりと脱で賜ひければ。獲はいたゞき打かつぎ岩頭に駈け上り。自はこぶくろ坂金龍水の池の邊に。年経て住む者なるが江の島の叔母君より。賜つたる肌の産着を悪人に奪はれ。五體の力盡はてしに今北條家の生うるこ。九萬九千の飾となつて神變。神通自在を得利那が間に彼の旗を。奪ひとつて参らせんとさかまく波に飛入て。分行く潮八重百重百の媚あるかんばせに。尾は二十尋の金の鱗月に映じておよぎ行く。辨才天の眷屬の旗を守り神體と思ひ。白波走りしは帆かけし船の。三重ごとくなり波の音に眼をさまし番所さわげば悪かりなんど。友平若君身をひそめ磯山蔭に忍ばる。源藤本經景木戸を開かせつゝと出で。風もなきに浪のおと千鳥鷗のみだる。は。天女丸が方より水練の忍びを入れたるにうたがひなし。すは／＼沖にものこそ見ゆれ仙術魔法の者なりとも。わが馬上に及ばんやともより武勇第一の。梶原が生靈入かはりたるその験。弓箭の木意このときとやがて物の具堅めける。此處に佐々木廣綱は相番ながら若君に。かねてお

を寄せしゆる聞ぬ顔にて控へしが、經景が打立つよし共にふせぐ風情にて、しやつ妨げんと馬鐙はなやかにこそいでたちたれ。經景其夜の裝束は木蘭地の直垂白銀の摺付ござね、白糸にて差綴したる班白織の鐙を着、玄ぼろの矢の二十四さいたるえびら搔負ひ、もと重藤の弓持て、雨夜といつしとび月毛と開ふる名馬に乗たりけり。佐々木がいでたつ物の具は紅襦袢に所々、四つ目ゆひ、摺たる直衣卵の花を黄に返して、袖標付たる鎧筋切ふにぬり籠の矢、吹寄藤の弓持て、長月といふ黒、栗毛の馬にぞ乗たりける。二人互ひに劣らじと引かけ、打たりしが、經景は佐々木に一反許進んで海へさつとぞ打入たり。廣綱先を越されしと聲をかけて經景殿、冬海は潮急し腹帯が延て見えさうぞ、深海に乗て鞍かやさんしめ給はぬかと呼ばれば、經景さもと思ひけん手綱を鞍のゆがみにすて、左右の鐙を踏すかし弓弦をくはへ、腹帯を解て引締め、縮る間に廣綱すつと乗ぬけて、佐々木が家の骨法は免あれといふまゝに、さんぶと打入り半町許先にすんで泳がせける。ねつたい佐々木殿高名せふとて不覺はし仕給ふな。此ごろ強のかづきも絶和布目茂つて見ぬひ、馬の足まとはせて過あらん笑止さよ、心得られよとたばかれば、親にては高綱が、つたへし習ひあんなりと、太刀を抜て水底を、切拂ひ、三途にさうと乗下り、手綱繰上げ聲をかけ馬に力を添へたりけり。冬もなかばの浦よく風磯打波とまさあげて水やそら、揺曇り、天も凍りて徹ちり、雲の脚さへ急潮に、底の岩稜嶺々として海上遙にくわい、たり。これは一騎當千の高綱が、嬌々なり、彼は文武二道の武者梶原が魂魄なり、いづれに勝負あらばこそ廣綱すゝめば經景つゞき、經景すゝめば廣綱つゞき、鬪を引捕へ、押ならせて渡すとすればさつ、け太腹さう、波鞍壺に打越てのためがたにつき流され、半月に乗るところもあり馬の草分刺つ、さら、さつと乗分け乗割て、一文字にゆく所もあり高き波には一極くれて、あつ、聲に跳越る

低き波にはしつと、當て、手綱を繰て乗下しうづまく浪の右巴、左巴にくる、くるり、の輪乗に潮を巻ほやし、巻もどし巻崩し蹄に、蹴立る潮烟、隔の霧と立ふさがつて山さへ見ぬ海の面、星を目當の双燈息もつがせず踏もためず、負じ劣らじ我先にとおめき、さげんで渡したり、經景馬や劣りけん馬上にや疎かりけん、三反ばかり乗おくれ淺海に駒を馳寄て、たゞよふ浮木に手をかけて一息はつとついたらば、佐々木は沖の流れ洲に駒をひかへて鞍蓋につ、立上り、惡ふい經景殿伯父盛綱が藤戸の一流、海をばかうぞ渡すものお先へ參る御免あれ、糧かいくり乗出す陸には兩家の郎黨粗子、波打際にて下浸り、片唾をのんで控へしは前代未聞と謂つべし、かゝる處に式部の冠者時定、百騎ばかり引辛し喚いて來り、やあ、兩人天女丸こそ宇都宮を語らひ何處ともなく落失せたり、方々がいさひは如何なる故ぞと呼はつたり、經景馬上ながら、扱は只今此海を泳ぎ越す者ひ故、兩人かくの如くおつかけひ、疑ひもなく天女丸はつ、め引下まらんと、駒の頭をたてなほせばやれ待て、一年にも足らぬ小丁稚、さやつらが分にて泳ぎ越すと思ひもよらず、それは必定水練を入れて、その身はこの磯山に隠れ居るに極つたり、我々山をかりいだし濱端へ追ひ出さん、兩人海に下立て射取れや射取れと下知すれば、承はると經景弓と矢とつてうちつがふ、佐々木もあつと應へながら過つ振にて冠者奴が、たゞなかを一筋と思ひ込めてぞ控えける、時をうつすなかりいだせと、打物ぬきつれ松明ふり谷よ峰よと、三響かりたつる友平今は、これ迄なり濱の手へおちたまへと、しばし支ゆる其ひまに若君磯邊に走り着き、うしろを見れば時定片手矢はげて追かくる、合はせんかた荒磯に沈まば沈めとさんぶと入り、渡るともなく行くともなくろく地に立る如くにて、四五町沖に浮み出で足下を見れば不思議やな、髪に與へし上の衣浪の上に漂流して、若君を救ひたてたるはさながら筏の如くなり、沖には經景鎌を磨き寄せば射留ん其勢

ひ、二陸には人数切先き揃へ返さば討んとめさしは、火刑に陥し罪人の取付く葛を黒白の、鼠きしつて悪龍舌をふるといふ。苦界のたごへに異らすのがれつべうはなかりけり。然つし處に二階堂入道、旅装束にて息をはかりに驅つけ、暫くく事のしさいは存せねども。是は大事の使わたくしの儀にあらす干戈をとめ聞たまへ。今度某大殿のおふせを蒙り、奥州高館に下り判官殿の墓を祭りさよめ。同じく頼朝より勘當の教書を取歸り、仰にまかせ只今焼すてやからは、勘當の罪さえて義経の靈魂妄執はれ、若君の御身の上武運の祈禱たるべしと、教書の封をさり下人にもたせし消火をとつて、打かくれば火焰炎々ど。天に通じて名將の俊逸せいち悦び給ふ其しるし。白銀の翼ある白鶴虚空に舞下り、天女丸の懷中にをさまり、「入ぞ不思議なる。判官の虚名晴れば識者のいきはひ方も弱り、梶原が亡魂は冥々として失せてげり。經景心茫然と夢かうつゝか空蟬の、もぬけの殻の如くにて手綱とる手もおぼなく、平首にいだき付く馬も足を立てかねて。波にたゞよひ浮ぬ沈みぬうたかたの。安房の浦路にながれ行く冠者いらつてヤアものくし。たとへ生れぬ前生は判官にもせよ辨慶にもせよ。現在にてはわが甥なり伯父にむかつて逆心かまへ。國をそこなひ家をやぶる悪黨征伐何の憚りあらん。船をうかべ熊手にかけて、弱め捕れと嘔まはり。とつと直邊におりひたる兵術無双の義経の、靈氣を感せし天女丸たちまち自然の妙を得て、浪も潮も事どもせずいははの嶮岨にひらりと飛び、磯の松が枝をどりこえ大勢にかけ向ひ。天狗にさづかる飛行の術鬼一が傳へし一卷の、太刀風さはぐ虎の巻獅子奮迅虎亂入。前をはらへば後にあり地を離れば霞に入り、陽炎稻妻水の月さながら飛鳥の、三萬如くなりさしもの大勢、一人に切たてられ冠者も數箇所のいたでを負ひ、命ばかりをのがれんと水練は心得たり、海へ撞き飛入て、伊豆の御崎をころろさし抜手を切ておよぎける。沖の浮洲に控へたる佐々木の廣綱、むかふ様

に駒乗入れ、天道を守る廣綱は天女丸の味方ぞや、尋常に腹を切りたまへさなくば佐々木が矢先にかけて。後世吊らはんといひければ冠者大聲あげて泣いたし。それは餘りむごい性、いかに水を得たればとて三里五里はおよがれず。今の間に鱈のるじきとなる我身、少しの命をたすけてたも、佐々木殿廣綱殿と立およぎして拜みける。佐々木返答にもおよばず中指取てからりとつがひ、ひやうと切てはなつ矢に肝のたばねを射とはされ、まつかい様に跳かへし底の水層と沈むを見て、殘る軍兵うら崩れしてみな散りくぐりに逃ちりける。時に海上漣たつて月清々たる波間より、紫金色の耳ある蛇うしはを巻き來る其音は、和琴のしらべの如くにて、磯部の松に攀上りくぐ。梢をくはへ尾を垂れて、鱈の衣をはらくぐ。三萬拂ひのこすや、「三枚は家の紋付旗の手の、悠々とかゝらせ給ひけり。若君三拜九敬して、いたゞき納め歸るさ。道の用心佐々木は馬上に先を打ば、後をおさへて宇都宮君判官の再誕なれば、二階堂は辨慶と敵の捨たる鎗長刀、つくばうさすまた熊手押取打かたげ、夜はしらくど七つ道具明け六つ、五つ五代の北條家、四つ世の中三つ鱈尾鱈を、つけてぞかたりける。

最明寺殿百人上臈

「行衛さだめぬ道なれば、來しかたも何處ならまし。これは一所不住の沙門にて、我この程は信濃國にひひしが、あまりに雪ふかくなりひはをに、先この度は鎌倉に上り、座禪にこもり春になり修行に出でばやと思ひひ、蝶の翅の白粉を草にこぼして梢には、鶴の霜毛を脱ぎかくる。雪は花より花おほき、木曾の深坂の、谷風は、吹けとも袖に、寒からで、名も妬ましき風越の、峰の吹雪を身には必む。身はすみぞめの墨衣、さながら雪の一筆鴉、尾羽打枯れし修行の旅、佛恩報捨の爲にもあらず、始終善

提の道にもあらず浮世の。たみにおはふかな。蓋へともる、竹の笠。似あはぬ身にも引しめてしやんと
 召したるはありさま。有難しとまたのみある。幾重越しても信濃路は。また谷峰の大井山人里遠く離れ
 坂。ちくまの川に渡し呼ぶ聲も。嵐にうづもれて。笠で招けば笠の端に霞。たばしる氷柱からく。輕
 井澤。みおぐれば。朝ばらけ。淺間の嶽にたつ烟。其一筋をさまぐに。霞にぬいじ雲に見て。歌人は
 思ひをのぶるとかや。我はけふりの起居にも。民の籠のにぎはひを天に祈りの千早振る。雪を袂に帯と
 れば。雪は五穀の精たりと。唐人も。豊年を祝ふしるしのあれ。くくく地下も在所も。にぎくくふく
 くく島。賤の妹背の妹は初磨る。せなは米搗く麥搗く。餅つくく望月の。里と詠むまであいと
 んくサアとんく。サアとんくくく。と杵の音。碓氷峠に差かゝり。登ればくたる谷川の凍らぬ程は
 聲立て。春も近しと岩間水木々の木の葉を。吹。ためて。今日山姫の衣配り。物裁よしといろくくの。
 錦たつなる板鼻の宿を。麓の坂本や諏訪の湖水なほ芽で。鴨や鷗や鶯のつがひも雁金も。下り居る程
 はおしなべて。みな白鷺と。深山嵐が。さらくくく。さつと吹てははつとむらたち拂ふ。翼に。己が
 ころく色品を。分て見せたる雪の空。殘の月は浮めさる。兎はなづむ。厚氷驛路の馬を波走る。走
 る馬にも鞭。武藏もちかき秩父山。八王子のやまがつも。外山の爪木樵つくし雪をくゆらす。炭籠や。
 深谷の宿の。ふかぐくと冬籠せし。一枝も。春待顔に初花のさきがけんとや一二の影。熊谷村に盃の佐
 野の蕪肴着にて。しめさめんと詠みおさし古歌を。吟してしのびさる。雪のさむさのさのみやは佐野
 の。わたりに着給ふ。やどりもがなと夕顔のそれにはあらぬ小家ののき。垂木まばらに傾きし雪折竹の
 かけすぞや。主人は貧女とおぼしきが年も三五の玉箒。庇の雪をかきおとし。落せば襟に袖口に。首飾
 元にひやくくく。つめたやと手を吹くも下主とてふして猶やさし。最明寺殿まがきにたすみず。

々お女郎。越後より下總の檜林へ通る所化の僧。今日の大雪山前へも後へもまわり難し。簀子のはしにた
 い一夜たのみまするとありければ。ハア、お安いことながら。主人の留守に私かどめまするもいかいな
 り。側をお頼みなされませおいとし様やと愛嬌ある。ム、ウ主人のお留守とはさては和女は内衆か。
 いとく主人は私が姉。この頃他國いたされて主人といふは姉さま。ヲ、然れば和女もあるじ同然。
 江口の君が假のやどに心留むなとすたは。それは色あるや法師炭の折か木のはしかといふやうなこの
 坊主。色事の用心ならば氣づかひ。あるなどのたまへば。娘もにつこと打笑ひもつとも色といふ物は。
 眉目容態とはいひながら何うやら時のはづみでは。鼻缺でも兎口でも油断がならぬとはしり込む。天下
 を裁断くは身にも。この返答は行かれてたすみ「給ふぞ殊勝なる世の中は。何か經世が留守住居。妻
 は手足も土大根蕪青菜も摘持て。かへる山路の白妙にア、降たる雪かな。いかに世にある人のさぞ面白
 ふ見給ふらむ。それ雪は鷺毛に似て飛で散亂し。人は鶴裳を着て立て徘徊すと云へり。されば今ふる雪
 ももと見し雪には變らねども。我は鶴裳を着て立て徘徊すと云へり。袂も朽て袖せばさ。細布衣。陸奥の。
 けふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。最明寺殿是こそは以前の女が姉ならめと。な
 ふく主のほうにてひか。は覽のごとく旅僧の身お宿の無心せしかと。主人のお留守とありしゆゑ
 待もうけたるは歸り。前後を忘る大雪今宵ばかりの恵み。頼み入るとぞおはせける。實にく易き
 仕事ながら見苦しき賤が伏屋。何とてお宿とすべき。いやく旅といひ三界の。家を出たる世すて人草
 のむしろも我爲の。玉の臺とありがたし是非に一夜と宣へども。あれは覽せわれく夫婦兄弟さへ。仕
 めかねたる體なればとやめやさんやうもなし。是より十八町あなたに。山本の里とて好きとまりのひ
 へば。暮ぬ間に一足も。いそがせ給へと言ひすて、庵の。内へそ入にける。あらさよくもなやよしなき

人を待つるよ。浮世の人の情なきも。我あやまりとかへりみて歩み「疲るゝばかりなり妹の王章。涙ぐ
 みいたはしやほ出家様。最前お宿とありしかども姉さまの心如何と存じ。そとに立せおさませし。かく
 零落しも前世の因果せめて出家に知遇せば。經世様の武運もひらけ後世のためにも悪い事。なされた様
 にはよもあるまじ。泊てさへ進ませば別に馳さうはいるまいと。わしや思ひますといひければ。フ、
 優しやよぞ気がついた。これはどの大雪に遠くはよもやと戸前に出で。なふく旅人お宿参らせふな
 ふ。餘りの大雪にすことも聞えぬよの。いたはしの有様やな。もと降る雪に道を忘れ。今降る雪に行方
 をうしなひ。一つ所にたゝすみて袖なる雪を打はらひくし給ふ景色。古歌の心に似たるぞや駒とめて
 袖うちばらふ蔭もなし。佐野のわたりの雪の夕暮。斯様によみしは大和路や三輪が崎なる佐野のわた
 り。是は東路の佐野の渡りの雪の暮に。迷ひつかれ給はんより見苦しくひへと。一夜は泊り給へやなふ
 旅の僧旅のお僧と招かれて。それは嬉しきころさし假の浮世にかりの宿。かりそめながら知遇の縁一
 樹の蔭の宿りも。此世ならぬ契なり。それは雨の木蔭これは雪の軒ふりて憂ねながらの草枕。是へとこ
 ろは請じけれ。いやこれ玉章。折角お宿やても供養いたさん物もなし。お淋しからうがどうせふぞ。姉
 様幸粟の飯さもしけれもおなぐさみと。櫃取いだせばア、そんな物なんのいの。折節わるふ九献もな
 しお菓子はないかと夕霜の。置ぬ棚をや探すらん。これは兩人旅にしあれば椎の葉に盛るとかや。粟の
 飯とは日本一の醍醐味。は馳走に預りたしどのたまへば。やれくそれはお嬉しやせめては何も奇麗に
 と。萩の折ばし土器もよしあり氣なる待遇なり。耻しやお僧様この粟と申す物。いにしへわが夫世にあ
 りし時は。歌に詠み詩に作りたるをこそ承れ。今はこの粟を以て命をつぎひぞや。實にや蘆生が見し榮
 華の夢は五十年。其郡邸の假枕。一睡の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。哀れや實にわれくも。打も

寝て夢にもむかしを見るならば慰む事もあるべきに。なふ御覽ひへ住うかれたる故郷の。松風寒き夜も
 すから寝られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべきとぞいふに。涙を浮べける。旅僧もあはれに催ふされ
 墨の袂をしばらるゝ。更行くまゝに夜寒さまさり冷わたる。何をか焚火に焚てあて参らせんや。思ひ付
 たり我夫世にありし時鉢の木に好き。數多の木をあつめ持れひしを。かやうの様に衰へいはれぬ實の
 花好きと。皆人々に参らせて今はやうく三本残つて。あの雪を持たる梅櫻松。わきて夫の秘蔵なれど
 も。今宵の待遇にこれを焚火と立んとすればしばらく。これは思ひも奇らぬ事。御志はありがたけ
 れども重ねて世に出たまひての。御慰み無用になして給はれよ。いやとても此身は埋木の。何時の盛に
 いづの花いつの時をかまつべきぞ。只いたづらなる鉢の木を。御身のために焚くならば是ぞ採葉汲水の
 法のたきと思召せ。しかもまことに雪降りて。仙人に仕へし雪山の薪。斯くこそあらめわれも身を
 捨て。人のための鉢の木伐るともよしや惜からじと。雪うちばらひて見ればおもしろや如何にせん。先
 冬木より咲くむる窓の梅の北面は。雪封じて寒きにも木より先さきたてば。梅を伐りや初むべき見
 しといふ人こそ。うけれ山里の。をりかけ垣の梅をだに。なさけなしと惜みしに今更薪に爲すべしと。
 かねて思ひぎや。櫻を見れば春毎に花すこしをそければ。此木やわぶると心をつくし育てしに。今は我
 のみわびて住む家櫻きりくへて。火櫻になすぞ悲しき。さて松はさしもげに枝をため葉をすかして。か
 りわれと植おきし其甲斐今はあらし吹く。松は元より烟にて。薪となるもこわりや伐くへて今ぞは
 垣守。衛士の焚く火はお爲なり能く寄て。あたり給へや。なほざりならぬ御親切寒さを忘れ。肌は彌生
 如月の暖氣にあたる梅櫻。花見る心地ひぞや。さてしも如何なる御行末。男主人の家名名字は何とや
 ひぞ。自然の時のお爲にも。何かくるしうひべき聞まはしと仰せける。ア、人がましやないにしへを

名乗るもさすが面伏せ。去ながら此上は何をかさのみ包むべき。これこそ佐野源左衛門經世が成る果。哀れと御覽ひへやさても過にし仁治二年。鎌倉は當最明寺殿の御兄君。經時公の御裁斷。夫の經世は將軍の供して在京のそのあとの事。經世が父わがためには舅。佐野兵衛政經ゆるもなく人知れず。關打に討れ給ひしを聞とひとしくわが夫は。取て返し下向の時一族の議によつて。鎌倉へも入れられず道よりすぐには勘氣とて。所領莊園召上られ經世親子が累代の知行。一所も残らず伯父源藤木經景に押領せられ。生甲斐もなき此ありさま。親の敵もおほかたは推量にまがひなければ。實否をたゞし討ん爲をり。他國に身をやつし。跡降かくす雪の庵。雪は春にも消ぬのころ夕も知らぬ武士の。身の上あはれみ給へやとさめ。とこそ泣き居たる。實に。それは聞およびたる物語。何とて鎌倉に上り其は沙汰はひはぬぞ。さればとよ夫婦もさは存すれども。運の盡とて最明寺殿法華堂の坐禪にこもらせ給ひ。萬機をうるはせ給はねば天照神の岩戸にこもり。月日の光かくれし如く理非の分れんやうもなし。さりながら斯くおちふれてひへども。取傳へたるあづさ弓矢竹心は張詰て。あれはらんひへ。是に武具一領長刀一枝。また彼れに馬をも一疋つないで持てひ。經世つねづね申せしは。只今にてもあれ鎌倉には大事ありと聞かば。この具足取て投げかけ錆たりとも長刀かひこみ。瘦たりとも彼の馬に懸鞍置てふはと乗り。女房に口取らせ一番に馳せ參じ。御着到に列つて扱合戦始らば。敵何萬騎あるとて。一番に刺入り手に立つ軍兵寄合ひ打合ひ。分捕高名はまれを現し。一方を攻破り君の馬の真先かけ。思ふ敵の大將と。無手と組んで刺違へ死なんす身の。エ、くちをしや此儘ならばいたづらに。飢寒にせまり死なん命。なんぼう無念の事さふぞ。姉妹くわつばと伏沈み泣き。とくこそ道理なれ。旅僧も至極のことわりに衣の。袖をぞ絞らる。よしや浮世の浮沈みかくては果した頼め。我世の中にあらん限りは

後甲斐を願ひ給へやと。言葉を殘しのこる夜も明方近くひましろく。雪もをやめば左らばとて暇やて出で給ふ。姉妹かりの宿ながらこれら縁と思召し。はるお下りの折柄は立寄り夫にも逢ひ給へ。命のあらば我々もとさらば。のほ名殘。自然鎌倉にお上りあらばお尋あれ甲斐。くはなけれども公方の縁になり申さん。は沙汰すてさせ給ふなど。いひすて。出船のとも。名殘や。三馬をしむらん。既に今年も。臘月下旬最明寺殿の臺所。松下は寮の仰として俄に稀有の觸あり。晝夜の早打ひまもなく近國残らず觸にけり。なふいそがしや。只今われら當國へ下る事餘の儀にあらず。さても最明寺殿天下の政道を考へなされんため。座禪觀法の方丈にとちこもり近習外様の待は申すに及ばず。は臺若君へもは對面なく禁足なされ坐ひ。此隙間を幸とや思はれけん。は舍弟式部の冠者殿佐野の源藤太を語らひ。謀反を起し終に其身も亡び源藤太は落失せやう。事治つてひ。斯様のさわざの出來するも最明寺殿館に坐なき故。國に執權なきは人に魂なく家に柱なく。餓饉に汁なく。餓に醉のなきが如しとあつて。かたしけなくもは臺所座禪をお出なさる。までは。最明寺殿は名代どの事にて。女中の身は執權職の装束を召され。は側には諸大名の奥方何れも男の扮装にて。非番當番ひまもなく政道執行ひ給ふ事。いにしへの尼將軍に相もかはらず。さはやながら人の口には戸が立られず。牝糞が時をつくるか鎌倉殿は。か。か。じやなご。嘲つて。すは大事といふ時に勢がつくか附ぬか物は試にあつて見よと。坂東八ヶ國の諸侍悉く物の具していそぎ鎌倉へ御參あれ。仰付らる。事ありと觸させられてひが。餘りに諸軍勢おそくひ程に。何とて遅はるぞ催促いたせとのお使を。承つてひは。急に急がばやと存じひ。やあ。何とぞぞそれへは參りあるは。武藏相摸のは人数とや。まづは速き事いそいで參りひへ。あれへ見わたるは上總下總のは人数じや。やれ。くらびやかなる扮装かな。遅いとのは事は急ぎひへ。

いや、是へ見わたるが常陸の人数か。道理で真先な武者が、黄楊の棒を提げたは常陸坊といふ心か。一段とはなやかないでたち何れをいづれとすされぬ。此國々へは最早参るには及ばぬ。足を助かつたア。未だ上野下野の人数がお見えな。先づ上野へ参らふ。何といふ是へお出あるが上野の人数はや。やれくうれしや参るに及ばぬ。今までのいでたちに劣らぬおびたい事かな。たい一刻も御急ぎいへ。最早ことごとく御参りひわれらは先へまかり歸り。各々鎌倉へ御着ある由上ふと存する。みなく聞れいへ關東八州の諸軍勢。是までひ着ひぞ其分心得いへく。觸て通りしいきはひはゆしくもまた 三重はなぐし

女主人

いにしへ秦の周宵が母千餘人の女武者を領して、昌陽に城をきづきそくてきを防ぎ、普振城と名けしは上代異朝の賢婦ぞかし。鎌倉の臺所先妣松下禰尼の風をしたひ。自ら執權の與意と鳥帽子際けたかく。水干の衣紋かきつゝろひ排精好の長絹。黄金造の佩刀式目所の上段に。悠々と坐したまへば右は白齒の御侍女。鳥田解いて若衆監廊下傳ひの長袴。花をならべし如くにては太刀の役調度掛。作法正しき廣庇諸大名の前方。いづれも男のいでたちにて。面々殿の役々の坐並みださず伺候ある。第一の座上には都六波羅陸奥守。繁時の北の方お遊の前。連理の若松若竹に比翼の鳳凰唐草の、織物したる河直垂蒔黄襦袢の袴とし。横幅ひろく結ばれしは此月帯の祝儀と。言のはもじさつゝまじさ。袖かき合せ着座ある。次は秋田の城之介義景の籠中。おりうは前は成人の子の親なれど何某の中將殿の乙娘。烏帽子なれたる黛に戀を。そめこむ狩衣の。露ながくとむすび下げ。うら紫の。藤袴。男

たる摺足も。爪先そつてぞ見えにける。これも同じ風折に巻繪の飾太刀佩たるは。足利左馬守の内室お吉の君。この春嫁入て人中を信夫文字摺信夫布。折目たゞしく着こなせし摺袴ののり立も。やはくどせし挨拶の。いづれもこれはお早ふと。物しづかにぞ伺候ある。次は佐々木興の入道の息女お百の姫。めゆひの直垂五色の糸にて菊とぢし。嫁入盛りの花づくし袖のかさねに句はせて大人くるしき。懸烏帽子。行儀正しき割膝に袴のまのたかければ。囁くねなるの下紐の裾やわかれん心にくさよ。同くついで四條藏人の奥左近のお方。金紋紗の狩衣薄色のさしぬき白銀づくりの太刀横たへ寺社奉行の座にぞ着れける。大目付は宿谷の左衛門が女房おつげの前。これも二人の子持條に鶴龜染たる摺袴。打刀差ほらし四邊近所を見廻して目をはたらかすかばせにお役はさぞ知られける。これは名越金吾の後家熊千代が母。おさいといふは年齢も磯部のうとう安方の。子を後見て身を捨す髪は切ても何のその。我子の末も君が代も萬歳烏帽子引こふで。御披露所に着座ある顔もつやくはやくと。老ひて再び若後家や。昔の蝶の吸殘す花の露浮くばかりなり。つぎは山名の。惣領娘おらくは今年十八歳。土岐の二郎が妹お振といふも脇づめの。年は往ねご格好の。大友太夫のお内儀おさち御前。思ひくの太刀狩衣。大納戸小納戸進物所御膳番。役所くに着座ある。さてそのほか御臺所の彌惣が女房。圍爐裡の間の加藤が女房おはひおこん。料理人の三太が女房お鍋の前。油奉行蠟燭奉行酒奉行の。彌吉兵衛が女房おたるの前おかんの前。茶湯坊主の珍齋が妻おちやくの前に至るまで其品々の男いでたち。直垂狩衣布衣素袍。長袴切袴へいれい白丁退紅丁袖をつらねしよそはひは。女護の島とも謂つべし賑はしともおるかなり。中にも佐々木入道が息女今日の着到承り。中門の扉押開けば東八箇國の諸軍勢。召に従ひ参上ある。當國には伊藤の一黨長野清原會我山越。河津大場竹の下櫻井岩永土肥岡崎。御崎三浦佐原田原小

笠原。小山平山宇都宮手勢を引率し、旗標馬標兜の星を耀やかし。中門の廣庭より大名小路の極樂橋。錐を立つべきらしい地もなく。人馬みち／＼並居たり晴がましくぞ。三馬見えにける。佐野の源左衛門經世は今度の出陣望む處の本望と、ちぎれ具足に鎧刀疲馬に纏たづな。女房は長刀かたげ馬の口に引添ふて。物其敷にあらざる氣色さぞ笑ふらん笑はゞ笑へ。所存はたれにか劣るべきと心ばかりはいそげごも。弱きによはき柳の糸のよれによれたる瘦馬なれば。打てごもあふれごも先へは進まぬ足弱車の。御所のこなたに駒を控へて見渡せば。東八ヶ國よりあつまつたる數萬の軍兵これを見て。如何なる者ぞ見ぐるしや。彼のさまで此中へ出陣は何事と。一度にどつと笑ふ聲鯨波をつくるが如くなり。此おと奥に聞えしかば御臺所御悦喜あり。みづから女の身にてこのたびの勢揃へ。斯様にしたがひ集る事これ皆殿の御威光目出度きゆゑ。若もかさねて如何なる大事あるとて。先づ此如く馳來らば即時に敵を追散し。鎌倉は千代萬代心やすや目出度やな。いで軍兵に一禮して歸さばやとのたまふ處に。裏の門より最明寺殿旅にやつれし御有様。御臺これはと驚き給ひさては座禪を御出かや。目出度うへの目出度さよとよるこび給へば。若君もたちいで、御對面こそにぎはしけれ。我此度座禪禁足といつはり。まこととは廻國行脚して民の安危をうかいひし。其すさまを見て冠者奴が悪逆。天の責目前たり。又天女丸が武功未たのもしく。北の方の勢づかひ。彼是以て入道が妻子ぞやと御悦は限りなし。扱この諸軍勢の中に。横縫のちぎれたる腹巻して鎧長刀を持。やせたる馬に女房のくちとつたる武者一騎あるべし。夫婦共にめしつれ來れど御誼あれば。佐々木が息女うけたまはりやがて。御門に立出る。大勢とは言ながら花紅葉といでたつ中。見まがふべくもあらばこそづか／＼と立寄つて。これ／＼証意なるぞ。男女とも御前へまかりいでられよ。經世おどろき何とそれがし夫婦御前へ召さるゝとや。あら思ひよらずや人たがへ

にてもひか。今一度御伺ひあるべうもやとありければ。いや／＼いかに見苦しきいでたちの武者一騎。女房に瘦馬引せたる者あるべし。召つれ參れとの御誼の上は左様の者は外になし。はや／＼參られいべし何がさてこのうへは。違背やさんやうはなし賢に／＼女房それがしが敵また論議上げ。召出されて頭を刎られためとおぼはたり。如何あらんといひければ。よし／＼それも力なし。たごへ夫婦が御前にて生首をうたるゝとも。一度鎌倉殿を拜し奉るよるこび。一念はいさぎよく親の敵讎人を。三日が内にどりころし此世の妄執はらすべし。いざさせ給へと打笑ひ大牀さして見渡せば。今度の早打に上りあつまる兵。綺羅星の如くなみたり。さて御前には諸侍其外數人竝居つゝ。目をひき指をさして笑ひ合へるそのうちに。横縫のちぎれたる古腹巻に鎧長刀。女房にかたげさせわるびれたる氣色もなく。參りて御前に畏る。ヤア／＼彼なるは佐野の源左衛門經世な。如何に女房。是こそ日外の大雪に。宿かりし修行者よ見わすれてあるか。其夜のなさけ忘れかたく召出してありつるはと。のたまへば夫婦の者長刀からりと投棄て。あつとばかりに頭を下げ感涙袖をぞひたじける。重ねて仰出さるゝは。汝か叔父源藤木つね景。父政常を討てあまつさへ。累世の知行を押領したる罪科まされなく。我女房の國を巡りし時彼のもの落人となつて隠れしを。房州の探題にや付け成敗を遂げさせたりと。御詞の下よりも獄舎の雜色百桶持て。經世が前に差おいたり經世餘りのありがたさ。蓋を取れば源藤太が首級なりけり。こは添き御高恩冥途の父がよるこび。現世のわれらが本望何時の世に何を以て。この御恩を報せんご手を合せ涙を流し。大牀に額をつけ仰ぎ居るこそ道理なれ。猶や仰出さるゝ旨ありちかふ參れと御膝ちかく召され。いで汝佐野にて女房がやせしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるごならば。ちぎれたりともその具足取てなげかけ。鎧たりとも其長刀を持。瘦たりとも彼の馬に乗り。一番に馳まらるべき由や

つる。言葉の末をたがへずして参りたるこそ神妙なれ。先づく沙汰の始めには經世が本領佐野の莊三十餘郷かへし與ふるところなり。また何よりも切なりしは大雪ふつて寒かりしを。女房がなさに秘藏せし鉢の木を切り、火に焚あてたりしころざしをばいつの世にかは忘るべき。さらば女房に引出物せん。いで其時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。その返報に加賀に梅田越中に櫻井。上野に松枝合せて三箇の莊。子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀。安堵に取副へ賜ひければ經世は是をたまはりて三段頂戴仕りこれ見給へや人々よ。始め笑ひしともがらも是程の御氣色。さぞうらやましかるらんさて國々の諸軍勢。皆お暇たまはり故郷へとぞ歸りける。其中に經世は。その中に女房は。悦びの眉を開きつゝ今こそ勇め此馬に打乗りて。かみつけや佐野の船橋取放れし本領安堵して。歸るぞうれしかりける。

明治三十九年一月二十五日印刷
 明治三十九年一月二十八日發行

近松全集 上巻
 定價金壹圓六拾錢

編輯者

三好 仲雄

東京市牛込區矢來町四十四番地

印刷者

植原 儀直

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷所

建昇 堂

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

不許複製



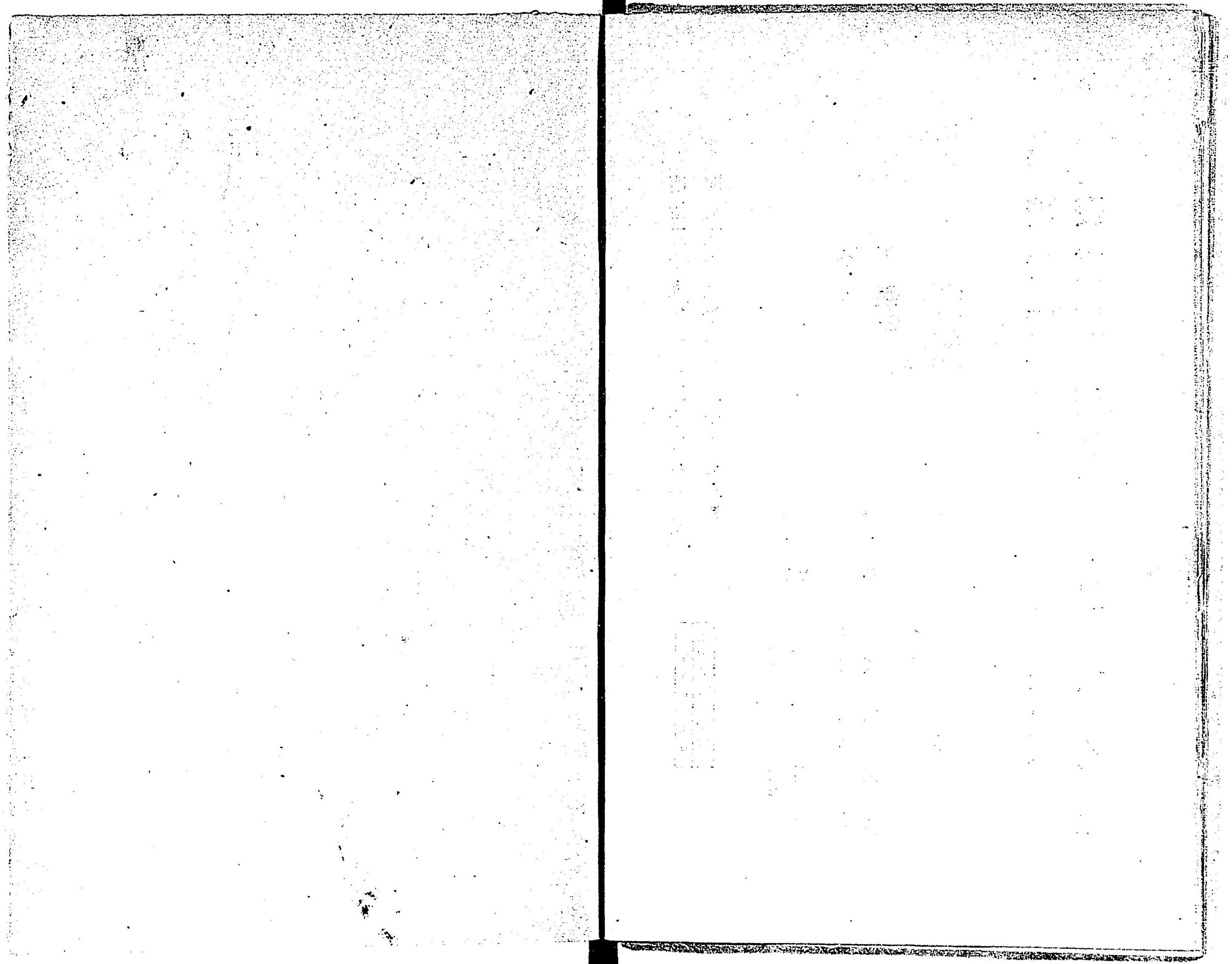
發行所

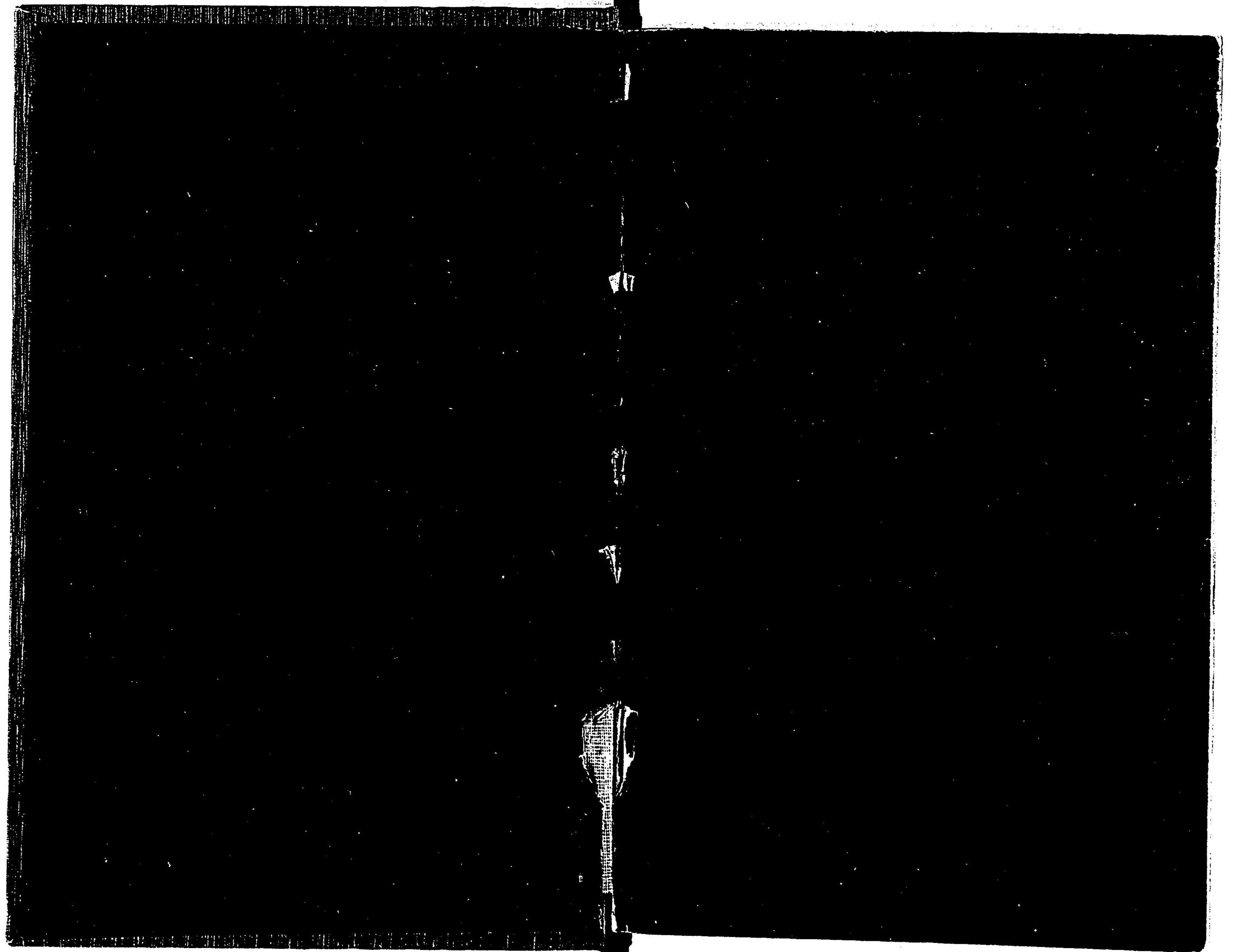
東京市牛込區矢來町四十四番地

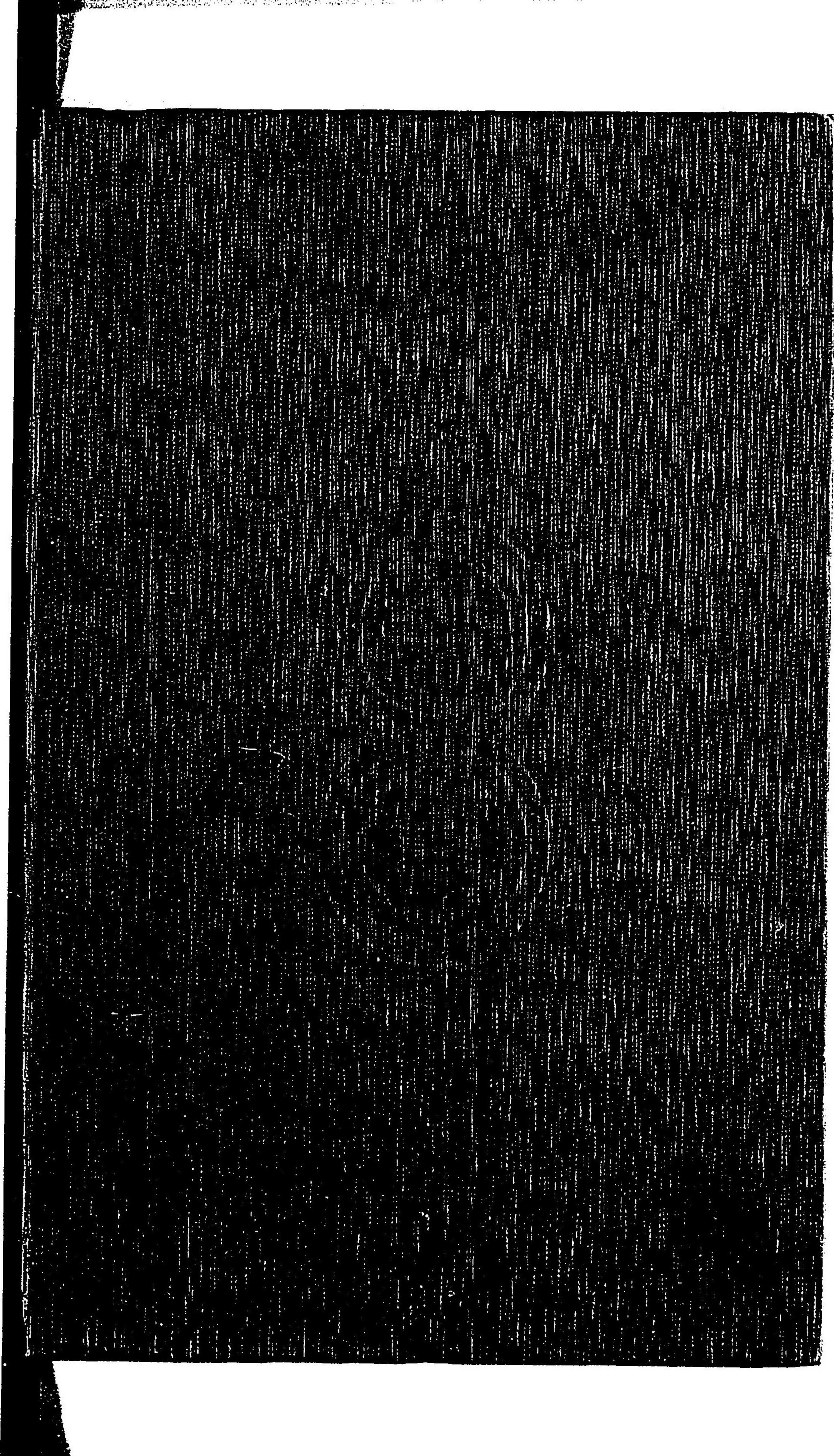
園屋書店

東京市日本橋區本石町三丁目
 大阪市東區備後町四丁目

寶文館







912.4
T:238.t2
M

088303-000-9

912.4-Ti238t2M

近松全集 上卷

近松 門左衛門/著

M39

DBI-0141

